
かくもそれは魔王様のゆるい日常

Ceez

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かくもそれは魔王様のゆるい日常

【Nコード】

N7778P

【作者名】

Ceez

【あらすじ】

【称号】によって人の運命が左右される世界。不運か奇跡か分からない確率により、世界に【魔王】と認められた少年、真門祐一。彼は自分の平凡と平穏な日常を求め、世間の冷たい目と軋轢に揉まれ早10年。高校に入学した彼を待っていたのは国級の称号【占士】をもつ者だった。——「初めまして魔王様、貴方に忠誠を誓いましょう」いやいやいや、何言ってるんですが崇めないで！？ 忠誠誓わなくていいですから、俺の平穏を返せ！——「この際です、魔王四天王を結成しましょう」だから作らなくていいー

っちゅーとろーが！ 運命に導かれ集う準世界級【精霊術師】たぶん常識人（？）と次のメンバーは……「女難の相がでていますね？」四天王と女難の相はかんけーねーと思う。

プロローグ

少年が居た。

彼はまごう事なき少年だった。

近所で評判になる程天才肌な子供でもなく、噂になる程のやんちゃ坊主でもなく。

ただ、唯、平凡な少年で子供だった。

平凡な少年に変革期が来たのは彼が六歳になった時であった。

その日、少年はランドセルを背負って小学校へ行こうとしていた。

「車に気をつけるのよ」と、母親に定番の注意を受け。玄関から一步でた少年が振り向いた瞬間、周囲の光景は一変していた。ごくごく普通のありふれた住宅街が広がるだけだったそこには、真っ白な空間へ変化していた。遙か彼方には一本線の地平線が、左右に視認出来なくなるまで伸びているだけ。

あまりの変貌ぶりに身動きすら取れず、思考がついていけない状況に目尻に涙が浮かんだ。

もう友達とも親兄弟とも会えなくなるのかと心細くなり、悲しみが増大する感情を制御しきれずに涙が流れ落ちる。

「ふえ……」

——泣かないで、

シャラン！

空間に響く鈴の音とともに優しげな声が少年の感情を押し留めた。

「……え？」

顔を上げた少年の真正面。

青い羽衣に身を包み、長い黒髪には金の鈴が幾つもつけられた髪飾り。顔の半分は薄いヴェールに隠されて口元には春の日差しのように柔らかい笑みが浮かぶ少女が居た。

唐突に出現した彼女に対し、驚きと神秘性に絶句した少年。涼やかな声が再び少年の耳へ届く。

——おめでとう、

誕生を喜ぶ母親に似た優しげな声が少年の心に響く。

「きみは……だあれ？」

風が流れ、薄桃色の花卉が視界を流れて行く。一枚が二枚、二枚が十四枚、十四枚が無数になり少年の視界から神秘的な少女を覆い隠す。

——誕生おめでとう、

無数の花卉の彼方、途切れ途切れに見える青い羽衣に向けて手を伸ばす少年。

「待って！ きみはだれっ!？」

少年の懇願など到底及ばぬ花吹雪の先。最後の一言を残して少

女は消え去った。

眩しい光に照らされた少年が、顔を覆っていた腕を退け目を見開くと、そこは何の変哲も無い住宅街が広がっていた。

何時もの光景に目を瞬かせ、キョトンと立ち尽くす少年に横合いから声が掛けられる。

「お早う、ゆーちゃん！」

「うわあっ!？」

飛び上がってバランスを崩し、道路に尻餅を付く少年の前に居たのは、赤いランドセルを背負った幼なじみの少女だった。

「な、なんだ……。みどりちゃんかー」

不思議そうな顔をした少女は首をコテンと傾けて、少年の突飛な行動に戸惑う。

「どうしたの、ゆーちゃん？」

「今ここにへんな子がいてね？」

立ち上がって腰の土を払い、自身もよく理解しないまま少女へ手を伸ばす。

「そうなんだ、でもだれもいなかったよ？」

「むう……。いたのになぁー」

少年と少女は手を繋ぎ、小学校へ足を向ける。少年の耳には先程聞いた声がまだ残っていた。

——誕生おめでとう、——

「まおーって何だろう？」

「まほーならしってるよー」

言われた言葉も聞いた事も特に不思議に思わないまま、二人は歩いて行く。

少年が尻餅を付いていた場所には薄桃色の花卉が一枚。やがて、風にさらわれて何処とも無い彼方へと飛んで行った。

——誕生おめでとう、魔王——

【称号】

人によって付けられるモノ。

国によって付けられるモノ。

世界によって名付けられるモノ。

人の運命に介入し、個人の意志など省みず、常識をネジ曲げるモノ。

誰かに賞賛されるモノもあれば、誰かに嫌われるモノもある。

ソレによって流転の人生を送るしかなかった者も居れば、栄光の表通りを邁進して行った者も居る。

【称号】によって国の運営さえ左右される世界。

ある日突然世界中の占いを生業とする者達が啓示を受け、口々に叫んだ。

【魔王】の称号を持つ者が現れたと。

世界が認定する【称号】を持った『世界災害級』ワールドハザードが顕現したと。

これは【魔王】の称号を世界によって認定された為に、平和な日常を渴望するひとりの少年の物語である。

プロローグ（後書き）

気が向いたら更新します。

1話 魔王様の日常（前書き）

なんかとあるっぽいな……。

1話 魔王様の日常

「ふわああああ〜」

真門^{まかど} 祐一^{ゆういち}は自宅を出た所で欠伸をして立ち止まった。

白い学園指定の半袖シャツに紺のズボン、胸ポケットには秋津宮^{あきつのみや}学園の鷲と一角獣の刺繍された校章。 右脇に抱えるのは真新しい学生鞆。

視線は住宅街の左場面へ、真門家より二軒奥から小高い丘へ続く階段がある。 階段の上には赤い鳥居がそびえていて、今まさにそこから飛び出した女性が軽快なステップで階段を下りてくるところだ。

翻ったスカートの中が見えそうな光景に祐一は慌てて視線を反対側へ。 そのままそっぽを向いていると背中からタッタッタッと軽快な足音が近付き、祐一の肩がポンと叩かれた。

「おはよつ、ゆうちゃん！」

「ああ、おはよう。 碧姉^{みどり}」

望美^{のぞみ} 碧^{みどり}。 祐一の幼馴染でひとつ上の学年、本当の姉みたいな存在である。 当初は”みどりちゃん”と呼んでいた祐一だが、年

を経るごとに呼ぶのが気恥ずかしくなり、ある日”望美先輩”と呼んだら他人行儀を嫌う彼女はストライキを起こし、彼の部屋の前で涙を瞳に溜めながらテコでも動かなくなった。 それ以来祐一は”碧姉”と呼ぶ事になっている。

高台の上にある霞神社の一人娘で、上に兄が二人居る。放課後は巫女装束に身を固めて家業を手伝っていて、祐一も彼女の巫女装束目当てのファンをよく見かける。霞神社は靈験あらかたと評判で、雑誌で知った者が恋愛成就や家内安全などでよく訪れる。

”魔王のお膝元に有りながら”と言う噂もそれを加速させているのだろう。

そのまま二人連れ立って歩いて行く。

目的地は近所の駅だ。新交通システムと名付けられたモノレールに乗り、五駅通過した所で降りる。

学園と同じ秋津宮と名付けられた其処は、祐一達の住む住宅地と様相が一変していた。近代的なビルや動く歩道が敷設され、未来都市もかくやと言った建造物が建ち並んでいる。ここら一帯を取り仕切る秋津宮グループのお陰だ。

駅周辺のビル街は、校舎か研究機関かの二択しか存在しない。

それでも学生や勤める者達の娯楽用に、ビル丸ごとひとつがアミューズメントエリアだったり、ショッピングエリアだったりと遊ぶ所にも事欠かない。

この駅を利用する者の大半は学生で、学舎は駅ビル丸ごとその周辺に建つビル群に収納されている。運動場すらもビルの途中階に設営されていて、科学と魔法の粋を極めた技術の結晶だ。

【称号】と言う世界に組み込まれたシステムが、人の有り方を丸ごと変えて早二百年。

【科学者】が既存の研究員や教授などとは段階の違う発明品を世

に発表し、技術史の歴史を塗り替えた。例えばたったひとりで産業革命を起こしてしまった。

【魔術師】を名乗る者が架空の世界や物語の中でしか起こり得ない超常現象を引き起こし、物理学を信奉する者達の常識を根底から叩き折った。

【騎士】や【剣士】に武器を持たせれば歩兵が戦車のような働きをする。

【錬金術師】の手により何の変哲も無いクズ鉄の塊が、見た事も聞いた事も無い金属へ姿を変えた。

世界によって称号を与えられた者達が、たった百数十年で人々の営みを根底から覆した。

しかし、覆すのは簡単だがそれによる一般人の混乱は数人の【称号持ち】だけではどうにもならない。一般人との軋轢を避ける為に一部の【称号持ち】が結託して、自分達の統制、管理を始めた。

ワールド・デグリー・エージェンシー
【独立世界称号統制機関】

（略してWDA）の誕生だ。 彼等は

【称号】によって人と隔絶した能力を持つ者達を集め。 その科学力で空飛ぶ人工島を作り上げて、其処を自分達の本拠地とした。

あきつのみや

秋津宮財閥は古来からの日本に於けるWDAの様なもので、開国と同時に海の向こうの同じ組織と手を結び、日本の中での影響力を強化してきた。 この地はその出先機関も兼ねていて日本中の【称号持ち】が集まる学院研究機関である。

真門祐一と望美碧はそこに所属する学生だ。

碧は今年で高等部二年目の在籍になるが、祐一は高等部一年。

そして今は六月、まだまだ成り立てはやはやの新生である。 とは言え二人とも中等部からこの学園に通っているので、校舎を見上げるのも今更と言った感じだ。

碧は称号を持たないごくごく普通の一般人、しかし祐一は違う。世界によって定められた【魔王】の称号を持つ唯一の人物であった。最初の頃はマスコミやら世間が散々騒ぎ立てたが、秋津宮が素早く彼を”保護”した為、混乱は直ぐに収まる事となった。

しかし秋津宮も慈善事業で保護した訳でなく、そこにはギブ&テイクが存在する。真門祐一は煩わしいマスコミや世間の目から隔離される為、秋津宮は【魔王】たる彼の行動をプライベート以外でモニターする為だ。

『貴方のその魔王としての力、何処から捻出されているのかとても興味深いわ』

【魔王】理論のプロジェクトチームの主任研究員から祐一はそう言われた。こうして秋津宮に降り立った時点から、祐一は学院のシステムの管理下に置かれる。最初のうちは何かしら人の目を気にしていたが、三年も経つと気にもしなくなった。

「じゃ、ゆーちゃん。また後でねー」

「ああ、うん」

昇降口で碧と別れ、自分の教室へ向かう。

廊下は動く歩道、階段はエスカレーター。一部には円筒形のガラスの中をエネルギーボートと呼ばれる床が上下に動くエレベーターもある。まだホームルームの予鈴にも余裕があるため、学生達はそこらで固まり雑談に興じていた。

二階にある自分の教室。実際には駅ビルの上にあるから五階に相当するが、校内表示はその辺りをほぼ無視して表示されている。

……に辿り着くと自動ドアを潜り教室へ足を踏み入れた。

教室内は既に登校していた生徒で半分くらい埋まっていた。【魔王】である祐一について物怖じせずに普通に挨拶を送ってくるクラスメートに挨拶を返すと、自分の席に腰掛けて溜息をひとつ。

「おやおや、朝から溜息とはお疲れですか？ 閣下」

すぐさま近付いてきた長身の影が机の前に立って声を掛けてくる。敬意を払いながらどこかからかう様な口調に、祐一は半目を上げて挨拶を返す。

「おはよう、桐人。なんでも見通してるんじゃないのか？」

「いやいや、閣下こそ。僕が何でも見通す事が出来るとは大間違いですよ？」

肩にかかる長髪に灰色の瞳、少し楽しそうな笑みを浮かべた整った容姿の青年がそこに居た。

三条 桐人^{さんしやう きりひと}。クラスメートだが高等部に入ってから編入組で、北欧帰りの帰国子女だ。WDA本部から秋津宮に出向になったエージェントで、祐一を【魔王】として崇め、自称”魔王四天王”を名乗っている。

ちなみにエージェントうんぬんは、本人が自発的に祐一に告白した。エージェントと言うだけあって一般人ではなく、国級の【占士】の称号持ちの人物だ。普段は女生徒の恋愛相談にその無駄に優れた能力を使っているため、彼女達からの支持も高い。

一部の男子からは目の敵にされている、少々レベルの高いイケメンである。

片や祐一は見た目から一般的な日本人と言った印象を受けるくらいでしかない。中肉中背で伸び過ぎない黒い髪に黒い瞳、時折その瞳が光の加減で金に光る時があるだけだ。

しかし、一度動くとも経済にとんでもない影響を与える称号持ちな為、進んで彼にちょっかいを掛けようと言うモノは居ない。それはそれで本人的には平穏な日常が送れて満足していた。

「途中で不快な出来事でもありましたか？ 何でしたら占いますが……」

「いや、いい。そーゆーのは廊下で期待の目を向けている女子達に使ってやればいいんじゃないか？」

視線を横に向けると、廊下からキラキラと憧れの眼差しを向ける女生徒が数人、此方側の桐人へかまってオーラをだしていた。爽やかな笑みを彼に向けられると、廊下に悲鳴だか感嘆だか判別しかねる黄色い声が響く。

軽くにこやかに手を振って黄色い騒音を加速させる桐人。

入学した初日に【魔王】に向けて拝謁した彼のせいで、高等部では既に二人の存在は周囲の認めるところだ。一部では誰が次の“魔王四天王”に入るかでトトカルチョが行われていた。平穏な日常を送りたい祐一にとっては望んで噂になりたい状況ではない。

軽い雑談を交わしているうちに予鈴が鳴り響き、廊下に居た生徒達が慌てて席に着く。時間になると扉が遮断され、所定の机に座っているかを判断して出欠が取られる。廊下に居る生徒は例外無く遅刻扱いにされるので、皆の行動は迅速だ。

二度目のチャイム、HR開始と同時に教室正面の全面ディスプレイに光が灯り、ほんわかした表情の緩くウェーブした髪を持つ女性が映し出された。1-Aの担任、山崎・F・ほもろ教諭だ。視線で教室を見渡した教諭はにっこりと柔らかく微笑んで朝のHRを

開始した。

『はい、皆さんおはよう御座います。今日は特に連絡事項等はありませんが、貴方達にとっては高等部の選択科目初日ですね。自分の受ける科目をキチンと確認して、所定の講堂へ遅れないように。連絡は以上です、今日も頑張ってくださいね』

軽く会釈をして映像は切れた。その次にクラス内で一人の女生徒が前に進み出た。

穂野木 穂乃香^{ほのぎ ほのか}、クラス委員である。手をパンパンと叩きながら皆の前へ出て、自身の端末から正面ディスプレイに英数字を表示させた。

DⅡ11、FⅡ9、AⅡ10と表示される数値を横に教卓、と言っても支柱の先にある小さなコンソール、を操作する。

「昨日取り決めた通りの教室移動を行います。D棟運動系が一番、A棟特殊系が二番、F棟実務系が三番です。なお、私はD棟なので教室のコントロール操作、誰かお願い出来ますか？」

「あ、じゃあ、俺がやるよ」

真っ先に手を上げた祐一に教室が一瞬ざわめく。しかし、それを制して隣に居た桐人が立ち上がった。

「それは僕がやりましょう。実務系が最後ですので、そこに行く僕の方が都合がいいでしょう」

「そう、ですね。それではこの後は三条くんお願いします」

一度自分の席に戻った穂乃香は次の授業の準備をしてから、祐一の所までやって来た。

「こういう時は動く皆、戸惑うから止めておいた方が良いわ」

「そうですよ閣下。【魔王】が自主的に動くとなんが起きるか分からない。と、一般人は誤解しますからね」

「……………はいはい、俺が悪うございました」

穂野木穂乃香は人外級【弓師】の称号持ちで中学時代からの腐れ縁だ。気さくに祐一と接するようになるまでは時間が掛かったが、校内では数少ない【魔王】の理解者で友人である。ふてくされたように溜息を付く祐一にクスクスと笑い、手を振ってそこを離れた。

彼女が教卓のコンソールを操作すると軽い振動が教室に響き、前後の扉に赤いランプが点いて防壁シャッターが下りる。そして外の景色がゆっくりと横にスライドした。ここで生活をしている者は慣れているが、高等部からの編入組みからは「おお」と声が出る。

教室そのものをそれぞれの専門棟まで移動させ、生徒の教室移動時間を短縮させるシステムだ。窓から見れば幾つもの教室が本校舎からブロックごとに外れ、中空を上下左右に移動しながら目的の校舎に移動してドッキングを繰り返していた。

最初のD棟は本校舎の南側なので、横移動で校舎ブロックから外れた1-A教室は本校舎を越えた所にあるD棟へ向かう。校舎の中段から四方に伸びた空港ターミナルに似たドッキング回廊のひとつに接続、内部の防壁シャッターが開き安全が確認されてから赤いランプが青く変わって扉が開く。

教室の前に待機していた十一人は、穂乃香も含めて教室を出て行った。

次は代わりに桐人がコンソールを操作する。校内のあちこちに

あるこういった入力形式のモノは、教員以外だと称号持ちしか操作する事が出来ない。称号主義の秋津宮の弊害だと言われるが、必要な時には称号持ちに頼めば済む話である。

A棟に移動する際には桐人に深くお辞儀をされて見送られ、祐一は背中がむずがゆく感じる感じに身震いした。

A棟は超常系の専門技能に細分化されていて、祐一が向かうのは魔法科。

講堂は二百人位までなら生徒を入室できる広さを持つ。選択科目は一年から三年まで合同なので大人数で行われる。

大体中段に腰を落着けた祐一の隣に、先に来て待っていた碧がちょこんと腰を下ろす。一緒に来た同じクラスメートの友人らしき女生徒が、祐一の顔を見るなり顔を強張らせた。

「み、碧……」

「どうしたの、博美ちゃん？」

「こ、ここ、大丈夫なの？」

「ん？ 別に変なところは無いけど。ね、ゆうちゃん」

「ああ、誰かが予約して此处に座りたいって事も無いぜ」

二人が妙に親しげなのが分かって半信半疑で腰を下ろす女生徒、但し碧の横をひとつ開けて。ニコニと機嫌の良さそうな友人と【魔王】が親しげに話す様を心配そうに見つめていた。

マイペースに定評がある碧はともかく、自分は平凡で無害な普通の人間だと自覚（他人の評価含まず）している祐一は首を傾げた。

そうこうしているうちにチャイムが鳴り、教卓付近の床に穴が開いて二人のローブを着た教師がせり上がってきた。腰の曲がった

老齡の理論系国級【魔術士】ラゴン・ラプラス教諭と、若手の青年実践系人外級【魔術士】蒼月リュウ教諭だ。

同時に生徒達は、カードケース型の学生証を各卓のスロットに差し込む。机のシステムが作動して、ノートパソコン型のディスプレイとキーボードが展開する。これがそれぞれの出欠を示し、教諭に伝えられる。

ラプラス教諭は自身のディスプレイに表示された名簿に欠席者が無いのを確認して、満足そうに頷いた。

まずは一年生へ魔法科としての主旨説明。二年と三年は去年と同じこ話を繰り返されているので、気の抜けた顔で聞いていた。それから魔法を使用する時の注意事項。その後にお手本として上級生及び称号持ちが指名され、前まで出て実演をやらされる。

生徒それぞれのディスプレイに指名が告知されるが、ピーツと鳴った自分のディスプレイに祐一はウンザリした顔になった。席を立てて前に出て行く祐一にも、凄い数の視線が突き刺さる。知らない仲でもないラプラス教諭を見ると、顎鬚を撫で付けながら満更でもない笑みを浮かべていたので、早々に諦めて実演に集中した。

称号持ちはその称号自体がライセンスを兼ねているので、特に制限無しで魔法や魔術等を行使できる。それ以外の素質ある一般人は、ある種の資格試験を通過しなければいけない。ライセンス無し魔法行使は違反者として最悪逮捕されてしまう。

【魔王】の称号を持つ祐一は、別名【魔を統べる者】と言われ、“魔”と名付けられる物ならその全ては祐一に従う。デモンストレーションとしてこれ以上最適な人材は居ない、と判断した爺さんを一瞬睨みつけた祐一。並んだ生徒達が火、風、土と単素魔術を披露したのを見てから、水の属性魔術を最小威力で解き放った。

途端に足元から六角状に水柱が噴き上がり、天井付近で複雑に絡み合い教室中に足を伸ばす巨大な鳥賊の姿をとった。最小に調節してこのあり様である。教室のあちこちからは悲鳴が飛び交った為、生み出した側の祐一は眉間にシワを寄せた。出現したクラークンが期待した視線を向けてくるのを無視して「戻れ！」と命じた。

命令に素直に従ったクラークンは構成していた水を解き、バラバラになって霧散した。細かい水滴となったモノは祐一の手の中に集まって圧縮され、最後には何処へとも無く消えて行った。

「うむ、昔とは比べモノにならぬの」

「こういう事は金輪際やめてくれよな、爺さん」

幼き頃の魔法の師に悪態を付いた祐一は、あちこちからの恐怖の色が混じった視線を特に気にせず席に戻った。碧からは「すごかったねー」と慌てる事も無い賞賛の笑みを向けられて、少し照れた。昔から驚くとか慌てるとかは微塵も感じさせぬのは彼女の特徴だ。

結局、初期説明だけで最初の選択科目は終わったが、祐一の披露した圧倒的な魔力のお陰で多少空気の強張った授業となった。

「ほう、そんなことになっていたんですか……」
「まったく、あの爺さんはいいいけどな。他の人達が迷惑するだろーが」

午前中の授業を終えた祐一と桐人は連れ立って食堂へと来ていた。

本校舎の屋上にある食堂にはあちこちに丸テーブルとセットになった椅子が置かれ、誰でも使える様になっている。屋上だけではなく、周辺の空に向かってエネルギーボートで出来た道が広がっていて、中空に浮かぶ小庭園だとか草原だとかの小島でシチュエーションを変えて食事出来る。二人が居るのは普通に屋上に設置されたテーブルだ。

普段であれば特に示し合わせた訳でもなく碧が居るが、約束した訳では無いので今は居ない。今頃は教室で友人達と騒がしくやっているのだろう。

桐人には教諭が祐一を指名した訳が推測できた。入学してから特に突飛なりアクションを起こしていなかった祐一に、業を煮やして強制的に行動を起こさせたのだろう。【魔王】の一部始終をモニターしているセクションには潤沢な資金が費やされている分、変わり映えのしないデータは見向きもされないのだから。

（これは過剰なアプローチを避けるように本国の方から横槍を入れて貰うべきか？）

「ん、どうした桐人？ 口に合わなかったか？」

「あ、いいえ。とても美味しいですよ、ご馳走様です」

「おう、それならいいや。妹にもそう伝えておくさ」

真門家は父親が研究員、母親が作家なため、家事全般は子供達の担当だ。交互に食事当番をしている祐一とその妹の雪香は、つい先日真門家へ遊びに来た桐人が、インスタントか外食の毎日を送っていると聞いてお弁当を作る事を提案した。

臣下が主君にそんな事をして貰うのは悪いと断った桐人。しかし雪香が「じゃあお兄ちゃんじゃなくて私が作ればいいんじゃない」と言う言葉に押し切られてしまった。

「今日は碧さん来ませんね？」

「ちよつと授業で悪い事しちゃったからな、友達に捕まったのかもしれない」

妙に怯えていた碧の友人を思い出した祐一は、何処が怖がれる原因になったのか疑問顔で首を捻った。自覚の無さ過ぎるのも問題ではなからうか？ と疑問を持つ桐人。

午後は特に変わった事が無く平穏な時間を過ごせた事に安堵する祐一。称号に依る弊害か、毎日何か騒ぎが起きる事がしばしば続く日が多いだけに、静かな日常は一杯の清涼剤みたいなものだ実感する。

まあ、そんな考えは直ぐ甘いものだった、と改めさせられる出来事に中断させられる事になるのだ。

一緒に帰ろうと約束していた相手、碧が祐一と合流した時にそれは起こった。

街頭スピーカーから”ヴィー！”とサイレン音が飛び出し、駅前に設置されている街灯が赤い警告灯に切り替わる。緊急時の避難警告灯が起動した為に、付近に居た生徒や職員が規定の場所へ。しかしこの都市に慣れた者は慌てない、慌てるのは編入組の人々だけだ。

本校舎の左斜め北側の建物から爆発音と共に二階部分の壁が破壊

されて、ターミナルの二階部分広場と隣接された場所を煙が覆う。
近くで逃げ遅れていた学生が慌てて駆け出す中、煙の中より団子
虫の形状をしたロボットが現れた。大きさはちょっとしたプレハ
ブサイズ。

赤銅色の蛇腹装甲に身を包み、伸び縮みしながら走行するソレ。
何故か本校舎の一階部分へ方向を定めた。

祐一達がいるのはエネルギーボード内の三階部分な為、ここまで
被害が来る事は無いが真下からはパニックになった人々の悲鳴が上
にまで聞こえて来る。中継の空中庭園に避難していた数人の学生
と共に下を覗き込んだ祐一は、碧によって服の袖を引っ張られてい
る事に気が付いた。

「ゆーちゃんあぁん……」

「え……?」

悲しそうな顔で何かを言いかけては止める碧。誰よりも祐一の
近くに居た彼女は弟分が平穏な生活を渴望しているのを知っている。
その為に自分の我が儘で助けに行ってくれとは言えないのだ。
そして祐一もそんな姉貴分をよく知っていた。癖になっている
溜息を長く吐いて碧の頭を撫でた。

「ゆーちゃん?」

「あーもしょーがねーな。ちょっと待っててくれよな、碧姉?」

返事も聞かずに空中庭園から飛び降りた。庭園自体は二十mの
高さに位置していて、常人なら飛び降りただけで死に至る。常人
で無い彼は風の魔法を操ってターミナルの出入り口付近へ。途中
で横合いから光の矢が高速で射出され、団子虫の表面に付き刺さる
のを見た。

「穂野木!？」

「真門くん!？」

ガレキの遮蔽物を旨く取って和弓を振り絞っていたクラス委員は、普段なら知らん振りを決め込む祐一を見て目を丸くした。戦闘能力を持つ称号持ちは、緊急時に事態の沈静化の為に尽力を尽す契約が結ばれている。それも自主性に委ねられるが、祐一に関してはその範囲外だ。理由はその事態にも依るが、ハッキリ言って強すぎるからである。

「珍しいわね貴方がこんな時に飛び込んでくるなんて。　どういった風の吹き回し?　いえ、鬼の霍乱かしら?」

「勘弁してくれよ委員長……。　幼馴染がちよつとな」

それだけで【魔王】も女性の涙には勝てないのかと理解した【弓師】は思いつきり噴き出した。爆笑する友人に憮然とした顔でソッポを向いた祐一は、団子虫にトンファーで討ち掛かっていた男子生徒があっけなく弾き飛ばされる様子を見た。

「なんだありゃあ?　新型の装甲か?」

「……みたいね。　ふう、面白かった」

「笑うところかよ、今のは?」

聞き返した祐一が面白いのか邪推の笑みを浮かべた穂乃香。　言っても無駄だと理解した祐一は、近くにあった二トン近いガレキを重力魔法で持ち上げて雷撃魔法を展開。　ガレキと床に磁力の反発力を作動させ、団子虫目掛けて撃ち出した。

剛速球で突き進んだガレキは団子虫に命中、装甲を凹ます事は叶わずに表面を滑ると、その向こう側の天井に突き刺さった。　下に

居た称号持ちが慌てて避難して、天井の崩落を避ける。同時に「なにやってんじゃーこらあ!」と非難も飛んで来た。

文句を言われ慣れてる祐一は片手を上げて詫びた。向こうはコッチに居るのが魔王とは気付かないので文句の言い放題だ。

「さっきから矢も当たったって意味無いのよねー」

「あれは瞬間的なエネルギーには強いだけですよ、閣下」

こりゃお手上げだと肩をすくめた穂乃香は、イキナリ出現して助言を出す桐人に驚いて飛び上がった。

「わあっ、びっくりしたあ! 三条くんももう少し穏便な登場方法は無いの?」

「これは失礼を、穂野木嬢。 と言う訳ですよ閣下」

「瞬間がダメなら、満遍無く圧力をかけてやればいいってことか?」

「そうですよ。たとえば水圧とか?」

「水圧って……、此処は陸上なのよ、三条くん?」

「水圧か。 だったら幾らでも手はあるな!」

【魔王】としての力を解放、加減して壊せないと困るので惜しみなく最大戦力を投資した。

あちこちの床や壁を突き破って露出した水道管から大量の水がターミナル内へ流れ込み、全長百mを越える巨大な水の魔獣クラークンが出現した。

ターミナル内ギリギリに体を潜り込ませたそれは、目前の脅威に硬直している称号持ちを避けて、六十m以上にも及ぶ十本の足で団子虫を包みこんだ。

「ぶっ潰せ! クラークン!」

—— キュイイイイイイッ!!

なんと表現して言いのか分からない鳴き声を上げて【魔王】の命令を実行したクラークンの死の抱擁。その足の水圧の中で一瞬にして直径五十cmにまで圧縮され、唯の金属塊に変わり果てた団子虫。

命令を果たした事で満足したのか水に戻ったクラークン。啞然としている称号持ち達を怒涛で押し流してターミナルを水浸しにして行った。後片付けの仕方にあまりの惨状に穂乃香はともかく、命令を下した側の祐一までもがポカンと口を開けて眺めていた。残ったのは限界以上に圧縮され、床のタイルにめり込む赤銅色の金属塊だけだ。

「真門くん……」

「あー、その、……スマン」

「流石は閣下、【魔王】の名に恥じぬ見事なお手前です」

心配した碧が降りてくるまで、祐一達は委員長の小言に付き合わされてた。

2話 魔王様と聖女様

ある日の真夜中、世界そのものが慟哭する様な叫びの感覚に襲われた祐一は飛び起きた。

脳裏に浮かぶのはあの羽衣を纏った少女が一人で静かに悲しんでいる光景、同調した悲しみに胸を突かれた祐一からもつうつと涙が流れた。

状況が分からず些かパニックだった彼の目前で丸いウィンドウが開く、緑の二重円が二つ。祐一にとっては見慣れた物体に、彼女達なら何か分かるかもしれないと、魔力を繋げて起動させた。

テレビ電話の機能を持つコレは、世界級の称号をもつ者に使える特典だ。繋げられる者は同じクラスの称号を持つ【占星術師】と【聖女】。二人とも地球の裏側のWDA人工島に居るが、世界とリンクして使うのではリアルタイムで会話が可能だ。

映し出されたのは金髪碧眼の成人女性と、すっきりとした細面の口元以外はヴェールで覆い隠された女性。

前者が【聖女】リシエル・フォトーン、後者が【占星術師】マデイ。

『あら【魔王】ご機嫌いかがかしら？』

「まだコッチは夜中だ、叩き起こされて些か気分が悪い」

世界を守護すると言われる聖女と破壊側の魔王。皮肉に聞こえるが、感情が込められてはいない挨拶で二人は友人の間柄だ。敵対する理由もない。

「何なんだ今の変な感覚は、【彼女】の悲哀がダイレクトに流れ込んで来たぞ」

『やっぱりそっちにも聞こえたのね。感じた通りよ、娘の死を【彼女】が悲しんでいるの』

「なんだって？」

【彼女】は称号を受けた時に出逢った少女、即ち世界そのものだ。彼女は自分達の様な【世界級】を子供として認識しているらしく、大きく感情が揺らいだ時に暖かい気配が近くに居る時がある。子供を心配した【彼女】の親心だ。

そこへそれまで黙っていた【占星術師】がポツリと零した。

『【転換者】が世界を越えた。これは既に予測出来ていた事』

「聞いた覚えの無い称号だな？ 未認定か？」

『そうね、彼女に関しては表に出るべきではないと私達も秋津宮も公表を控えていたわ。彼女が長くないのはマディの預言にも出ていたから……』

震える睫毛を伏せた聖女は残念そうに呟く。【占星術師】の預

言はほぼ当たる。彼女が言った事は予定調和の内と、時折曆に取り入れられて公表されたりするのが普通だ。

公表されたモノでないのであれば、先程聖女の言葉通り密かに進行するだけのモノだったらしい。

「何処の人間だ？」

『日本よ』

「……そうか、同胞として葬儀に出るべきか？」

祐一の提案に困り顔で苦笑する聖女。占星術師がその憂い顔の代弁をした。

『ユーイチ、貴方は自分の自覚が足りない。魔王が接点の無い一般人の葬儀にでたらパニックになる。寧ろ私の預言にノイズが入るから止めて』

「む……」

世界級は世界級の預言を明確な形では得られない。一動作で世界に与える影響が過剰な為に、調和に掛かる波を大きく乱すらしい。ヴェールの奥から睨まれてる気がした祐一は素直に行かない事を約束した。

『まあ、私は行きますのですけれど』

意表を突かれた発言に硬直する此方と向こう。占星術師のジト目に晒されてるであろう聖女が、全く気にしない顔で祐一に向かって胸を張った。重い息を付いた占星術師は諦め切った雰囲気だ。

「一塊の一般人の葬儀に【聖女】が顔を出すのかよ……？」

『あちらのご遺族にも話を通さないといけないでしょう？』

『寧ろ聖女が魔王の居る日本に赴くのが問題だろう』

『大丈夫、此方には頼れる軍師のメル友がいらっしゃるもの。彼に力を借りますわ』

聖女のメル友の軍師って何だよと突っ込みたくなったが、彼女が言った事を覆さないのは分かっていたので、占星術師と同じく反論を放棄した。

「早速準備をしなくっちゃ」とウキウキ気分で通信を切る聖女。占星術師はその後に目礼だけして通信を終わらせた。

明日と言うか、今日という一日がとてつもない憂鬱な予感に汚れ捲った日だと祐一は確信した。

『いえ、此方は其処まで感情の流れ込みはありませんでしたので…』

「そうか、感じたのは同じ時間か」

『おそらくは間違いないかと』

「分かった、変なこと聞いて悪かったな」

『いえ、この様なことでしたら幾らでも』

望美碧は登校しようとして玄関口から聞き覚えのある、というか馴染みのある話し声が聞こえてくるのに気がついた。

いつもと違い少し早めに家を出ると、望美家の飼った犬をわしゃわしゃ撫でている真門祐一の姿があり、思わずマジマジと見つめてしまった。幼馴染の”ゆーちゃん”は夏祭り等のイベント時でも無い限り、子供の頃と一変してこの神社には遊びに来なくなっていたからだ。

原因は彼の受けた【称号】にある。本人の弁解を述べるなら『神社に魔王が居たら参拝客にも悪いだろう？』とのことだ。そんなものは関係ないし、真門家も大事なご近所さんなのだから何時でも遊びにいらっしやいと諭していた碧の母には苦笑いで返した祐一だったが、普段は頑として自主的にやって来る事など無かった。

「おはよう、なにしてるの？ ゆーちゃん……」

「ちよーつと夢見が悪くてさ、ミコトをもふもふしたくなっただ。
おはよう碧姉」

碧に気付いた祐一は鞆を担ぎながら立ち上がる。その足元で、一般の犬種よりはややガタイの大きな茶色の犬が丸めた尻尾を千切れんばかりに振っていた。大きさはセントバーナードくらいあるがれっきとした柴犬だ。正式名称は碧の祖父が名付けた素盞鳴尊スサノオノミコトと言う。そこまで呼ぶのは祖父だけで、他の者はミコトと呼んでいた。

特に疑う気もなかった碧は「ゆーちゃんも苦勞が絶えないねー」と納得した。その日の登校中は、子供の頃の思い出話になったのは当然の流れと言えよう。

教室に着いた祐一は何時も通りに桐人からの挨拶を受け、席に着くと今日に限って【情報屋】が突撃してきた。

人外級【情報屋】の土師木はじき 庚こうだ。

この学年に妙な噂が飛び交う時は、まず土師木を疑え。などと言わしめるお騒がせ人物で、自発的に流す話は虚偽半分真実四割真心一割、とか言う冗談なのか本気なのか意味不明な部分があり、聞き流すのが皆の常識になりつつある。

その問題の人物が祐一を見るなり接近して来る、途轍もない嫌な予感がぷんぷんと匂ってきた。

「なーなー、真門。 【聖女】 様が来るって本当なん？」

(……やっぱりか)

この場で一番話題にされたくない問い掛けに、動揺を押し隠して無表情を貫く。

これに食い付いたのはクラスメート達だ。ざわっとした空気が教室を満たし、色めき立った一部の者が土師木に詰め寄った。

「なんだそりゃ！ マジなのか？」

「【聖女】様がいらっしゃるって？ うそーっ！」

「ばっかオマエ等、真門に確認しに行くって事の方が信憑性あんべ」

あっという間に教室どころか廊下にたむろっていた生徒からその階の端々まで噂が広がり、大量の生徒が1-Aの教室に殺到した。

群集より早急に避難した祐一が呆れて、土師木が埋もれた黒山の人だからから目を反らす。

「流石【聖女】様、人気者ですね」

桐人が傍に寄る為の恭しい礼をした後に感想を述べた。勇者と
言うわけではないが、この世界に置ける”光の救世主”みたいな扱
いである彼女は優しくて人当たりも良い。全世界を股にかけて大
勢のファンが存在し、どこへ行っても黒山の人だかりに囲まれるの
が実状だ。

付き合いの長い祐一からすれば、普段の聖女は10tクラスの特
大の猫を被っている、と言った方がしっくりくる。悪戯好きで欲
望に忠実なほうが彼女らしいと思っていた。あれの本性を他の者
が知っても人気は変わる事がないんだろうかと、些か心配する。

世間的には敵対者のように思われているが、大切な親友だからだ。

「本当に来るの？」

うんざりと人だかりを眺めていた穂乃香が質問して来た。 本人としては聖女云々以前に騒ぎを何とかして欲しそうな顔だ。

「来るとは言っていたなあ……」

「おやおや、本人から言質は取ったのですね？ 流石は閣下」
「何ソレ、真面目な話として何しに来るの？」

【聖女】の行動理由として挙げられるのが『世界平和のために』的な事だけに、穂乃香の疑問は尤もだろう。 マスコミに対しては良い餌かもしれない、何しろ日本に居るのは【魔王】。 世間一般では敵対者、正反対の理念を持つ者、『破壊者と救済者、全面対決の兆しか！？』とか新聞や週刊誌の見出しを飾りそうで祐一には頭痛の種になりそうだ。

だからと言って【転換者】の話題を出しても良いとは思えない。 WDAで真相を隠していたと言う事は、世界級との真実を暴くだけで全社会に与える影響が半端ないモノなのだろうと推測できた。 その所だけは適当に知らない振りをしておく。

—— 火の粉がコッチに飛び込んで来る事も知らずに……。

その通信が届いたのは昼食の時に。 たまたま珍しく桐人や碧のみならず、穂乃香や校舎の違う雪香までも一緒になるという偶然で。

真門雪香^{ゆきか}は祐一の一つ下の妹で、特に称号等は持っていないごく普通の一般人だ。この場にいる女子の中では一番背が高く、百七十に届くぐらい。祐一と並ぶと良く双子に間違われる。ショートカットの落ち着いた雰囲気、中等部制服のセーラーよりはスーツの方がよっぽど似合うと言われる事が多い。時折演劇部の助っ人で、王子役や男装の麗人役をやらされたりす事が多々有るため、学内の女性から『殿下』と呼ばれ親しまれていた。この辺は有る意味似たものの兄妹かもしれない。

場所は食堂区域、幾らか高さのある離れ小島と呼ばれている場所で、木製のテーブル備え付けの椅子に腰掛け、楽しく談笑しながら食事を取っていた時にだ。

「今日のお弁当はどうですか、桐人さん？」

「いつもありがとう御座います、雪香さん。毎日とても美味しいですよ」

「え、なに？ 三条君って真門君の妹さんにお弁当作ってきて貰ってるの？」

少々意外な顔をして雪香と桐人を交互に見る穂乃香。そんな何時の間に！？ といった誤解がありありと見て取れたので、慌てて雪香本人が訂正を入れた。

「はい、桐人さんって食生活が心配なんです」

「俺が弁当を作るって言ったら……」

「そんな恐れ多い、臣下が閣下の施しを受け取るなんて出来ません」
「……って言うもんですから、お兄ちゃんがダメなら私が作りますと。それで」

「そうなんだ。じゃあ今度は私も作って上げるねー」

「いえ、流石に望美先輩にまで迷惑を掛ける訳には参りません」
「ってどうしたの、真門君も雪香ちゃんも変な顔をして？」

何気無く親切で発言した碧の言葉をやんわりと断る桐人。揃って顔を見合わせた真門兄妹が眉をひそめた。目ざとく気付いた穂乃香が質問する中、視線で会話した兄と妹は頷いて祐一が碧を諭した。

「あのなあ、……碧姉は弁当作るのはやめておけ」

「ええー、私だってちゃんとお弁当ぐらい作れるよー」

「碧姉さんのお弁当は量が膨大じゃないですか。あれは花見に持って行く時以外は遠慮して下さい」

思い起こせば中等部の時、体育祭で彼女が作ってきたのが重箱五段二つだった。望美家が三人、真門家で三人、計六人で食べるには遥かに多すぎた。流石に食べきれなくなり教師陣にも配ったのは記憶に新しい。花見の時にはその倍である。人数が十人に増えていても全く減る気配がなかっただけに、望美家では彼女に弁当を作らせる事を禁じていた。

碧が不満そうにぶうーっと膨れた瞬間だった、それが祐一の目前に現れたのは。

緑の二重円、ご丁寧に中央には赤字で『SOUND ONLY』のと書かれただけの通信円。

これを見た事があるのは桐人と雪香だけで。二人とも驚いて、途轍もなく厄介ごとを背負って嫌な顔に変化した祐一を見た。答えない訳にもいかないので魔力を送り込んで回線を繋ぐ。

『こんにちわ【魔王】、お食事中に御免なさいね』

「折角の憩いの時間に無粋過ぎやしないか？ 【聖女】」

涼やかなそれでいて硬い声に、感情を感じさせぬ冷たい声で答える祐一。 雰囲気を一変させた祐一と、とんでもない相手との会話に口を挟もうとした穂乃香は桐人によって口を封じられた。

口元で指を立てて静かにして下さいとのジェスチャーに無言のまま、こくりと頷く。 雪香の表情がいささか硬いモノになっている反面、隣の碧は何処吹く風の如く母親作のお弁当をついばんでいた。

『……………』

「……………」

そのまま向こうも此方も無言状態が続く。 これには流石に桐人以外の者がハテナ顔になった。 実際のところは同調^{テレパス}で会話しているだけで、他の者が居るためおおっぴらに口にし難い内容の為だ。

その内容とは以下の通り。

『ゴメン、ちょっと迎えに来てくれる？』

「なんで俺がんな事せにゃーならねーんだよ。 立派な迎えが来てんだろ？ 日本政府とかWDAとか」

『だって堅苦しいんだもん、【魔王】に攫われたって事にしとけば言い訳もたつでしょ？』

「お前のファンに非難轟々されるのは俺なんだがな……」

『それが貴方の仕事みたいなものでしょ？』

「そんな存在理由を持った覚えはねえっ！」

『でもお葬式は今日みたいなのよねー、貴方に攫われてる最中なら何処へ行こうと誰も追求しないでしょ？』

「……マスコミは嗅ぎ付けて来るだろーよ」

『んじゃ、宜しくー♪』

伝えたい事だけを述べて通信は一方的に切られた。

「確信犯かあの野郎……」

悪態をつく祐一と一緒に居た者達はさっぱり要領を得ない。会話の殆どが聞こえてないのだから当然だろう。

「閣下のお好きな様に」

感情の読み取れないニコニコした表情で桐人はそう促した。臣下らしく上司の判断に従うと明言したが、祐一には丸投げにしか聞こえない。実際、話の流れは聖女と魔王にしか理解出来てないのだから当たり前だ。

雪香は「お兄ちゃんの人生には口出ししません」と、宣言した。称号関連のドタバタには超常のものが多く、巻き込まれて酷い目に合った経験もあるだけに関与しないスタンスを取った。勿論、祐一も巻き込む気はない。

穂乃香は「早退なら私が先生には伝えておくわ」と先に切り出し、碧に至っては「ゆーちゃん、女の子には優しいもんね」と逃げ道を塞がれた。

最早一つしかない道に進めと追い立てられた祐一は、最悪な気分ですでに上がった。この鬱屈したモノは聖女、……にぶつける訳にはいかない。

だったらもう腹を据えて、魔王らしく陰鬱に迎えに行つてやろうと決めた。

「桐人、穂野木、後頼んだ」

「はいはい、お勤め頑張つて」

「行ってらっしゃいませ」

大仰に頭を下げる桐人と片手をぱたぱた振って送り出す穂乃香。

「一応、お客様分夕食作っとくね」

「頑張っ
てねー、ゆーちゃん」

素直に送り出す碧と深読みして準備を申し出る雪香。

祐一は呪文を唱える事もなく望んで闇を呼び寄せると同化し、水墨画の龍が空を滑るように駆けて行った。それに追従するかの如く、魔の気配に誘導され空のあちこちから黒い筋が合流して行く。

空の彼方へ去る頃には一端の黒雲と化していた。

それを見送った友人一同は、昼食を終わらせると各々自分の出来事へと手を付けて行く。おのおの

穂乃香は食堂に備え付けの端末から職員室へ回線を繋ぎ、真門祐一の早退を告げた。桐人は自前の端末からWDAへ、魔王の行動を妨げない様に通告を入れる。

「雪ちゃん、聖女さん分ご飯作るの？」

「はい、前にも一度いらした事があるので。その時にお友達になってくれと言われました。碧姉さんも来ます？」

「うん、行く行く。私も聖女さんに会ってみたい」

天下の聖女様に対して礼儀がなっていないと、一般的な常識を持つと自負している穂乃香は頭を抱えた。隣で「微笑ましいですね」とニコニコしている三条桐人は魔王寄りの考えを持つので、常識云々などは期待できない。

唸って考え込む穂乃香を見ながら桐人は吹き出した。

「まあまあ、穂野木さん。実際のところ聖女様は気さくなお方です。あんまり堅苦しい態度を取ると嫌われますよ」

「え!?! ……そう、なの?」

「おそらく明日には学院にもいらっしゃるでしょうから、その時にでも確認してください」

明日にはきちんと閣下が連れてくるだろうと当たりをつけた桐人は、穂乃香に聖女様を魔王が紹介してくれるだろうと伝えた。明日の学院は面白くなりそうだと悪戯っぽい笑みを浮かべながら。

——
ところ変わって空港。

当日の朝になって、聖女来日を伝えられた日本政府は緊急に迎え入れる体制を整え、空港に外務大臣を派遣し楽団を揃える等の準備をして専用機の到着を待っていた。空港のそこかしこには耳ざといマスコミやファンが詰めかけ、空港利用者よりそちらの人数の方が多い為、もの凄い混雑となっていた。

やがて中央に御殿を備えた双発の飛行機、色は真っ白が空の彼方に姿を現すと空港全体がワァッ! と歓声を上げた人々によって大きく震える。

近付いて来るにつれ双発の飛行機と見えたソレは、二つの首を持

つ純白の巨鳥が背に金の御殿を乗せて飛翔している事が分かった。
その場の全員がスケールのデカさに沈黙し、一瞬遅れて更に甲高い歓声が上がる。

優雅に着陸した巨鳥の背、御殿から白いドレスに金の羽衣を纏った聖女が姿を現すと、歓声はなりを潜めその天上の美たりえる聖女に視線が集中する。誰も彼もがうつとりと頬を染めて彼女の容姿と、その神々しい光を放つ神秘性に見惚れていた。

空港周辺にはテロを警戒して報道関係者のへりを禁止していたが、周辺の警戒に当たっていた空港の管制室で異変が起きていた。

子鬼を幾匹か連れた身なりの良い老紳士が何処からとも無く現れ、管制室をジャックしたのである。

「我等が主のご都合により貴方方には不自由をして貰いますぞ」

老紳士は胸に手を当てて一礼する。片眼鏡モノクルが光を放つと同時に、室内の人々は焦点を失った胡乱な瞳となり、バタバタと倒れていた。室内を席卷していた小鬼グレムリン達は窓をすり抜けたり、壁をすり抜けたりにして空港内へ広がって行った。

マスコミや迎え待ちのファン達の頭上にも小鬼が飛び回り、カメラ等の機器を次々と使用不能にしていた。小鬼だけではなく壁の隅に赤い瞳を爛々と光らせた巨大な黒犬までが沸き、人々はパニックになっていた。滑走路の頭上では曇天にわかに掻き曇り、不自然な黒い雲と言うよりは闇が停滞していた。そこから四つに分かれた闇塊が落下、空中で形を変え竜を模したわだかまる闇獣となって聖女の乗機鳥の四方に着地した。

外務大臣等歓迎団がうろたえ泡喰って逃げ出す中、光の粒子となって乗機鳥が霧散し、光を纏って空中に浮かぶ聖女の背後に闇の中心核が舞い降りた。流れる様な突起を左右に四対づつ持ち、六つの

赤い瞳を輝かせた闇より黒い衣を纏った祐一が浮かび上がった。

「あいつ変わらず地味で派手ねー」

「どっちだよ？ 仕方無いだろう、魔の力を使おうとすると自然にあちこちから寄ってくるんだ。俺が騒ぎを引き起こしてる訳じゃねえよ」

「この惨状で？」

眼下を見渡す聖女。 歡迎団は何時の間にか滑走路に倒れ伏していた。 ターミナルには無数の小鬼や最下級の魔物が沸きまくりで、そこに居た人々を恐怖のどん底に突き落としている。 望んでやっただけではないが、原因の一端を担っている祐一としては頭の痛い事実であった。

機材の一角から染み出すように影が二次元から三次元へ、軟体動物が形を得るように人型へ変化して老紳士が姿を現した。

「……やっぱお前か」

「魔王様に置かれましてはご機嫌麗しゅう」

恭しく一礼した老紳士は祐一と視線を交わす事無く、そのままの姿勢で命令を待つ。

「……分かっていると思うが、後の收拾は任せるぞ」

「御任せください、王の望む通りに怪我人などは出しませんよ。」

我の名にかけて」

「どーだか」と呟いた祐一はリシエルを伴って空に舞い上がった。高速で遠ざかっていく空港を振り返ったりリシエルは、祐一に疑問に思っていた事を聞いた。

「なんなのあの御爺さん、随分高位の魔族みたいだけど？」

「俺が動こうとすると先回りして下地とか、後始末を率先してやってくれるんだよ。魔族内でも特に派閥には属して無くて、ああいったことをすると自分にも利益があるみたいでな。こっちの怪我人を出すなどの命令は巡視してくれるんで重宝してる」

「それ重宝したらヤバくない？」

「……だよな。もしもの時は俺が滅ぼす、責任持つて」

「大丈夫かなあ……」

数時間後、住宅街の一角に喪服のドレスを着込んだリシエルいつもの制服に戻った祐一の姿があった。自分の姿を見下ろして、おかしい所が無いかチェックしていたリシエルは、ひとつ頷くと目の前の家の呼び鈴を押した。

「お勤め宜しく」

「えー、着いて来てくれないの？」

「馬鹿、折角葬式が済んでお清めが終わってるのに俺が行ったらまた穢れるだろう。日本はその辺うるせーんだよ、俺は外で結界張ってるぞ。マディにも言われたしな」

「ちえっ、しょーがないなあ」

舌打ちしたりシエルの前の玄関口が開いて、喪服に身を包んだ二十代前半の憔悴した女性が姿を現し、リシエルをひと目見て絶句した。

「突然の訪問失礼致します。この家人の方でしょうか？」

「は、はい。……あ、いえ、従姉妹ですから、少し違います……。あ、あの、聖女、様が何用で？」

柔らかい安心させる笑みを持って女性の前で優雅に一礼するリシエル。それを見た祐一は変わり身の早さに慥然とした顔に変わった。

「本日は僂くもこの世界を離れた同胞に挨拶を、そして詳しいご説明をしに参りました。ここには貴女お一人ですか？」

「あ、……父が中に。……同胞？ あの子が……？」

「中にお邪魔してもよろしいでしょうか？」

「は、はいっ！ どうぞ。……でもあちらの人は？」

外でこちらに背を向けていた祐一を見た女性は訝しげな表情になった。

「ああ、あれは心強い私のセキユリテイわたくしです。お氣になさらずに」

「は、はあ……」

学生がセキユリテイ？ と女性の顔にありありとでる疑問を見た【聖女】はクスリと微笑む。「此の世で最強ですよ」と告げると女性に誘われて、家の中へ姿を消した。

祐一はソレを見届けると闇を呼び寄せぬように細心の注意を払い、人払いの結界を周辺に張り巡らせる。民家の表札を一瞥すると、雪香にだいたいの帰宅時間を告げる為、携帯を取り出した。

「各務、
か……」

3話 魔王様と同盟

何だかんだと途中で寄った同胞の喪儀に長居をしてしまった聖女リシエル。彼女と共に祐一が自宅へ戻ったのは、六時過ぎになろうかと言う時間帯だった。

聖女とはいえお客様なので、くつろいで待ってもらおうと思った祐一は居間へ続く扉を開け、そこに広がる光景に啞然とする。不自然な祐一の行動を疑問に思い、リシエルは隙間から居間の様子を盗み見た。そこに広がる光景に、祐一と同じく目を丸くした。

「ユウイチ……、日本の食卓はありったけの皿を並べる所から始めるの？」

「……んな風習があるかい」

居間にはテーブルの上から床に至るまで、一品料理の乗った皿で埋め尽くされていたからだ。そこへ廊下側から声が掛かる。

「お帰りなさい、お兄ちゃん。……と、リシエルさんもいらっしやいませ」

「あ、ゆうちゃんお帰りー。聖女様もお帰りー」

心底理解出来ないと言っても言うように頭を抱えた妹と、満面の笑みを浮かべ、聖女相手でも物怖じしない幼馴染みがいた。

兄の説明しろアイビームを受けた雪香は、一品料理だらけになった居間の惨状を簡潔に述べた。

事の始まりは碧も調理をすと言って聞かなかった為に、料理一つにつき皿一枚に納まるといった制限を付けたのではある。そう

したらあら不思議、きちんと一品料理を適量で作ってしまったので、制限をつければ姉を制御出来ると思ひ込んでしまったのが雪香の敗因であった。途中、足りない材料を買いに出掛け、碧から目を離してしまった雪香が帰宅後に見たモノは……。三倍程にその皿数を増やした一品料理だった。

以降の惨状は居間に足の踏み場もない皿の軍勢が物語っている。結論としては量を制限すると数が増える、という事らしい。

一部の皿を重ねるようにして何とか人の座れるスペースを作り出し、ようやくとお客を座らせる事が出来て雪香は安堵した。ひさしぶりの人数が多い食卓に、引きこもりの母も呼んでくる事に。

二人の母親の真門綾観あやみは基本的に自室に引き籠もって仕事をしている。なにをしているのかと言うと絵本作家だ。父親の毅たけしは秋津宮で研究員として勤めているが、子供達は何を専門にしているのか聞いた事はない。時折研究室に泊まりとかあるくらいで、超然に忙しいということはないらしい。

ボサボサ頭で眼鏡を掛け半纏はんてんを羽織った綾観を祐一が部屋から引っ張り出し、居間へ連れて来るくらいには毅も帰宅した。家にかかるなり妻を抱きしめてスキンシップを図る。それから背広を脱いでネクタイを緩め、今更気が付いたように祐一へ顔を向けた。

「ん、お帰りなさい毅さん」

「ただいま綾観さん。……と、いたのか息子よ」

「俺はオマケか……」

家族の中で祐一だけが称号持ちで、世界に二つとない特殊な位を受けたと言う事実は家族を多少揺さぶったが、特に偏見や疎外等は

なかった。当初は親に受け入れられなかったらどうしようか、と考えていた祐一は毅が最初から秋津宮の関係者だった事もあり、環境を変化させられる事もなく、それまでと同じくして育てられた。

その辺だけはおおらかな両親に、感謝してもしたり無いくらいだ。

まあ、それなりに懐の広さを見せる両親もこの状況は想定しなかっただろう。

いったい誰が中流家庭で子供の幼馴染みと食卓が囲める場に、世界的有名人の【聖女】が同席するなどと予想するだろうか？ 碧は年下の幼馴染みの友人だから名声なんざ気にはせずに。雪香は両親が留守の時に一度会っていて、しかも本人から直々に『お友達になりましょう』と畏れ多い言葉を貰っている。祐一に至っては、以下省略だ。

「こんばんは、リシエルと申します。初めまして、ユーイチさんには何時もお世話になっていきます」

皿に囲まれた部屋の中で、流暢な日本語を操る美貌の麗人に頭を下げられた綾観と毅はパカッと口を開けて硬直し、次の瞬間には慌てふためいて居間から超特急で走り去った。

「お兄ちゃん……。母さんにお客様が来るとか言ったの？」
「言ったが、部屋から出すまで寝ぼけ眼だったからな。何処まで聞こえていたのやら」

もはや確信犯な兄をたしなめる妹。ニヤリと笑った祐一は「こういう反応を見ないと俺達の称号は良く分かんしな」と呟き、リシエルを苦笑いさせていた。

食事が再開されたのはきちんとした格好に着替えた両親が揃った十分後だった。十分で化粧をしてボサボサ頭を綺麗に梳き、白いブラウスに濃い緑のロングスカートに着替えた綾観に、雪香は戦慄を感じた。穀はスーツを脱いで、クリーム色のズボンと上半身はワイシャツの上に首元に青いラインの入った白いセーター。二人ともガチガチに固まりつつ、カクカクした3DCGのように【聖女】へ挨拶をしていた。

「こ、この度は、よ、ようこそいらっしやいました……」
「こここんなな何もお持て成し出来ない所でもも申し訳……」

しどろもどろに口を開く二人に対し、リシエルはクスリと微笑みかける。それだけで電撃が走ったように、緊張感がみるみる去っていくのを二人は感じた。相手にリラックス効果を与える【聖女の微笑】である。

「そう緊張しないで下さい。今の私は【聖女】ではなく、只のリシエルとして友人のユーイチを訪ねて来ただけです」
「は、はあ……」

訪ねられた先の当の本人である祐一は、妹と幼馴染み合作の春巻きを満足そうに頬張っていた。両親の恨めしそうな視線に気付くと、不思議そうな顔で返す。

「いや、リシエルも俺と同じく世界級じゃねーか。俺と同じ対応で接すりゃいいんじゃない？」

「お兄ちゃんは息子でいいでしょうけど、リシエルさんはWDAの

代表格と言う肩書きと、世界の善の頂点に立つ人と言う認識の隔た
りがあると思います」

「私としてはプライベートにまで立場を持ち出すつもりはありませんし、ユーイチの言ってる通りで構いませんわ」

あっけらかんと立場の相違を自分に例える祐一に、雪香は呆れて突っ込んだ。しかし、本人から無礼講を許可されて、やり場の無い視線が兄へ突き刺さる。何時もの事なので、祐一は全く気にせずそれをスルーした。

普段は食事中でも新婚夫婦みたいな空気を纏う両親も、ちぐはぐな雰囲気にとどころではなかったようだ。子供達が和気あいあいと食事する中、無言で食事を終わらせるとさっさと部屋に引っ込んでしまった。

「つか六人掛かりで半分しか減らねえ……。少しは考えろよ碧姉」
「うーん、御免ね」

悪びれの無い笑顔で頭を小さく下げる碧。祐一だけで碧と雪香とリシエルに匹敵するだけ消費しても、まだ三十皿程残っていた。雪香は日持ちするものを重箱に詰め、碧に持たせる。日持ちしないものはタッパーに入れて冷蔵庫へ。上手く行けば明日の朝食と弁当でなくなるだろう。

片付けを雪香と祐一がしている間に碧は重箱を一旦家に持ち帰り、着替えを携えて戻って来る。その間リシエルは一番風呂に入って貰う。リシエルは風呂に浸かるよりはシャワーで済ますタチなので、片付けを祐一だけで引き継いで雪香と碧と一緒に風呂へ。

「家事の得意な【魔王】って……。信者が見たら幻滅するんじゃないですか？」

「俺は信者なんか持った覚えはないけどな。勝手に崇拜する奴等なんか知らん」

何故だか知らないが破滅思考で凝り固まった信者があちこちにいらっしゃる。傍迷惑な事に時折騒ぎを起こし、時々ニュースになったりしていた。そして人々の非難がやった奴等ではなく【魔王】の方に來るのが頭痛の種なのだ。

怨嗟を口にする訳にもいかず、——マジで呪いとなって飛んで逝く為—— 慚然とした顔で皿を拭く祐一の足元。コーナーの影が唐突に揺らめき、立ち上がる。波打つ黒い不定形がのっぺりした人型になり、祐一の背後に跪いた。祐一が特に関心を持たない目で一瞥すると、その口を開き何事か呟く。

一言二言開閉し、現れた時と同じく床に染み込むように姿を消した。ちなみにキッチンカウンター越しにいたりシエルに声は聞こえていない。ほぼ無音に近いが、聖と魔では伝達波長チューニングが違うからだ。

今のが何かと言うと、防犯用のセキュリティにしている使い魔のようなモノだ。見た目不気味なだけの影に見えるが、祐一の命により人畜無害に偽装しているだけで、正体は魔人クラスである。

「どうしたの？」

「どうやら【おまえ聖女】のお迎えのようだ。黒塗りのゴツイ車とSP、ウチの回りで手を出しあぐねているらしい」

幾ら迎えの任務と言えど、魔王の家に率先して訪ねよう、……な

どと考える者は居ない。 例え魔王が学生でSPが百戦練磨であろうと、世間一般の認識はそんなものだ。

リシエルはそれだけ聞くと、身支度を整える。 着の身着のままではあったが、亜空間ポケットからヒラヒラとした銀色のドレス（正装）を取り出し、着替える。 目前で服を着替えようとしたリシエルに、祐一が慌てて空間遮断した無色不透明の囲いの中で。

「うーん、お泊まりくらいは出来ると思ってたんだけど、秋津宮の動きの方が早かったわねー」

「こんな所で着替えんな馬鹿たれっ！」

壁の向こうからの焦った祐一の様子に、企みが成功した笑みを浮かべるリシエル。 外見上は似たような年齢だが、リシエルの方が遥かに年上だ。 世界級称号を得た事によって老化が止まってしまった為である。

ドレス周りに視認出来る聖光で金の帯を纏う【聖女】の装いとなったりリシエルを外まで送る。 SP達は聖女を見つけると車を住宅街の路地へ寄せるが、闇を纏った祐一が居る為に近付くのを躊躇していた。

「何をSPに対して殺気立ってるのよ？」

「雪香とか碧姉とか楽しみにしてたんだぜ？ 一晩くらい居ても良いじゃんか」

片や衣服やその身から仄かな燐光を発し纏い、宵闇の中一際浮かび上がる【聖女】。 片や隣から発せられる光にも影響を受けない、夜の暗闇よりなお深い闇を纏った【魔王】。 第三者から見ると険悪な雰囲気魔王と、平然とした聖女が対立している図としか見えない。 妹達の楽しみより立場を優先したリシエルへの祐一のやつ

かみでしかないが、迎えに来たSP達は周囲に撒き散らされる聖と^{ハル}魔の対立寸前の緊張感に吞まれていた。

「お兄ちゃん!？」

「ゆーくん! どーどー、落ち着こう。 ね?」

リシエルもWDA代表という立場が無ければ祐一達の歓待を受け続けていたが、人目の多い所での魔王との対立は世界の軍事バランスに深刻な影響を与える可能性がある。 どうやってこの場を取り繕うかと思案していた。 そうこうしているうちに、辺りに蔓延する剣呑な空気を感じ取った雪香達が、家から飛び出して来た。

SPを背後に控えさせ、正装したリシエルと、兄との対立を見て一瞬で何が起きたかを把握した妹は、真っ先に兄を宥めに掛かった。 屈強なSPすらも近寄りがたい魔王^{あに}の腕を掴んで聖女より引き剥がす。

「ほら、お兄ちゃん。 リシエルさんも今日はキチンとした来日なんだからさ、立場つてもものがあるでしょう。 我が儘言ったらダメだよ」

「いやちよつと待て雪香、俺はなあ……」

「そうだよーくん。 我が儘言うのは女の子の特権で、ゆーくんが言ったらダメだからね!」

妹達の気持ちを汲んでの行動だったのに当人達はあっさりとしたもので、言いかけた言葉を飲み込んだ祐一は闇を引っ込めた。 当然、濃密な魔の気配に釣れられて寄ってきた魔の眷属を、手を振っ

て解散させる。

間違っていないが些か見当違いな方向で碧に怒られ、溜め息をついた祐一にリシェルは声を掛けた。

「またお忍びで来たら厄介になるわ。申し訳ないんだけど、この埋め合わせはその時に」

「いや、いいけどよ。秋津宮にはこっちから抗議はしとく」

渋ったのが馬鹿らしくなる結果に、肩を落とした祐一は大人しく引き下がった。魔王が覇気を潜め引き下がったのを見たSP達は、自分達の職務を遂行すべく動き出す。程なくして聖女は黒塗りの車に乗ってその場を後にした。

翌日、1-Aの教室に何時もより遅れて登校した桐人は、教室に蔓延したピリピリした空気と、クラスの一角から学生が退避している真門祐一を中心とした空白地帯に、何事かと首を捻った。

無論昨夜の【聖女】と【魔王】の誤解から生じた、対立とは言えない騒ぎの報告も受けている。雪香と碧の介入によって深刻な問題になる前に事態が収拾されたとも。但し、住宅街に撒き散らされた濃密な魔力によって、魔力酔いになった者も出ているとの報告を受け、秋津宮の衛生局から専門の対処班が派遣されている筈だ。

抗議が魔王に集中しないように意識誘導する処置も取られているので、真門家が近所付き合いで孤立する事はないと思われる。

流石の土師木じょうぼうぎも昨日の今日で、この状態の祐一へ突撃レポートを掛ける勇氣はないらしい。学院全体には早朝から既に訪れている【聖女】への歓迎ムードに覆われていた。そこへ来て【魔王】のただならぬ様子にクラスのみならず、高等部全体が緊迫した空気に包まれていた。

一部の報道関係クラブからの推測は、両者の間に致命的な亀裂が生じたのではないかと。と言う意見と、来日時の騒動が知れ渡っているところから、光陣営と闇陣営のバランスを取る為の予定調和のうち、だと言う意見もあった。

一般人よりは称号持ちの方がこういった空気に過敏な反応を示す。腕組みして溜め息を付いた委員長、穂乃香からの「どうにかして！」との命令形の視線が桐人に向けられていた。

自称四天王の身としては【魔王】の意向に口を挟む気は無いが、穂乃香嬢との友人関係に余計な波風を立てない方を選択した桐人は、主へのご機嫌伺いに向う。

「お早う御座います、閣下」

「お早う桐人、今日は何時よりも遅いんだな？」

「ええまあ、本業の方が少々立て込んでまして……」

「ああ、WDAの方でなんかあったのか」

そのなんかあった原因の当人に言われ、苦笑いで返す桐人。祐一は特に普段と変わりなく、授業の準備をしていただけだ。唯、放射されている威圧感が人を寄せ付けないだけである。

チラリと壁際や廊下に避難しているクラスメートに目をやった桐

人は、慇懃な態度で一礼した。

「閣下、畏れながら申し上げます」

「何だよ、改まって？」

「その苛烈な気を収めて頂けませんと、クラスの皆の迷惑になると……」

言われてから初めて気付いたように教室を見渡した祐一は、自分の周辺からクラスメート達が疎開している現状を確認した。慌てて「あ！ 悪い」と軽い謝罪で皆に頭を下げてから、周囲に放射していたプレッシャーを引っ込めた。

一般人より感覚が鋭敏な為近付けずにいて、やっと本人に面と向かって文句を言えるようになった穂乃香が、表情堅く突撃した。

「もう、真門君！ 何があったか知らないけれど、皆の迷惑になることは止めてよね！」

「まあ、特にこれと言った理由は俺には無いんだけどな。 他の奴等がなあ」

「ん？ それはどういう意味……」

祐一の言葉尻に混じった不穏な表現に、桐人と穂乃香が嫌な予感を感じ取って身構えた。程なくしてその予感は、廊下から届いた生徒の悲鳴によって現実のモノになる。

慌てて廊下に飛び出した穂乃香を筆頭にクラスの武闘派が見たモノは……、廊下の隅にわだかまる黒い質量を持った影、天井に張り付いた不定形の影、窓枠に絡みついた生き物のようにうねる影。

黒い霧が生物の形を無理矢理取っているような影、影、影、という不気味な光景であった。ホラーハウスも真っ青のおどろおどろしいモノ達に、廊下に居た者は教室に、教室に居た者は廊下にと泡食って飛び出してきた。 あっという間に不気味な影から逃避しよう

とする生徒達でパニックが起こる。

……が、走り出そうとした生徒達は内側から凍りつくような重圧プレッシャーを感じ、恐怖で足を止めた。発生源は教室から廊下へ姿を見せた真門祐一からで、濃密な『魔』の気配が一般人にも視認出来る位に物質化して周囲へ。波動が祐一を中核として四方八方へ広がった途端に、影達は輪郭を滲ませて掻き消えた。

その所業に絶句してフリーズを起こしている穂乃香に振り向いた祐一は両手を広げ、肩を竦ませ「ほらな？」と答えた。

「……なるほど、そういう事ですか」

「いや、三条くんだけで納得されても判らないわよ！」

称号者権限（魔王の圧力）で廊下に溢れていた生徒達を教室に押し込め、廊下側の窓へ寄りかかった祐一は目で桐人に話を促した。主に腰に手を当て、立腹している穂乃香に話を通す為だ。

「……で？　どういうことよ？」

「簡単な事です。閣下はこの学園のあるこの地に、十年以上関わっています」

桐人の説明に穂乃香は頷いた。【魔王】が出現したのは十年前、同時に秋津宮あきつのみやは称号者である祐一を保護下に置いた。その時は製菓会社として秋津宮の出先機関がこの場所あるだけだった。……が【魔王】の能力を調べて行く途上、僅か五年の間を経ただけで、

秋津宮はこの地を丸ごと管理下に置くまでに成長した。元々秋津宮が持っていた称号者のノウハウと、魔法魔術魔力の効果的な運用方法を確立した手腕によるものである。祐一が協力していた事が前提で。

例えば空中食堂庭園で足場に使われているエネルギーボード。

あれは魔力を持っても運用器官、魔法魔術の才能の持たない人間から抽出した魔力と超科学と錬金術の混合した技術だ。勿論、非人道的な実験体が居る訳でもなく、キッチンと魔力提供者とした職員が詰めている。そんな技術が生み出されるほど、この秋津宮は祐一にとって第二の生活場みたいなものであった。

「つまりは十年以上【魔王】様のご威光があまねく染み渡った『魔』の領域、とも言えるでしょう。そこへ『光』の頂点と言った【聖女】がやって来たのです。直接【魔王】の御下命が行かない魔属が最大限に警戒し、ああやって視認出来るまで現界しているのです」
「もしかして真門君がプレッシャーを振り撒いてたのって……………」
「？」

「ああ、まあ、うん。押さえ込んでた。知性のある魔族達はいけどな、命令系統の確立されていない下っ端魔属だと、強い光の気配に触発されて有象無象が溢れてくるからな」

ナワバリに入り込まれた野生動物みたいなものだ。との説明に穂乃香の顔は盛大に引きつった。

それはつまり【聖女】が秋津宮に居る限り、この状態が続く事に他ならない。四六時中【魔王】の放つ波動の中に居なければならぬか、魔属の博覧会下で生活するかを選べと言うことだ。

これは祐一にとっても苦渋の選択である。まさか馴染み過ぎた地でこんな弊害になるとは全く予想しなかったのもあるし、一般人に無理難題を押し付ける気も無いからだ。対極の存在がいるせいで普段の生活に波風が立つなどと、祐一にも不本意だった。

どうする？　と言った視線を受け、全校生徒への選択を迫られた穂乃香が言葉に詰まると同時に、彼等が背にした窓が不意にディスプレイと化す。黒いスーツを纏ったショートカットの、キツメの顔立ちをした二十歳くらいの女性が映し出された。

「ありゃ、静疏さん？」

『やあ、祐一。　お話中悪いけど、統括理事長室までご足労願えるかな？』

「いいですけど、三人ですか？」

話掛けられた祐一が桐人と穂乃香を指差した。　穂乃香だけは慌てて両手を体の前で左右に振る、自分は除外して欲しそうな表情で。

『いや、祐一と三条君だけで構わない。　現状、秋津宮の状態に關しての話でね？』

「はーい、直ぐ向かいまーす」

唐突に現れた映像はそれだけ伝えると消失した。

今の女性に伝えられた場所は、高等部のある駅ビル校舎より南側に燦然とそびえ建つ高層建築物にある。　秋津宮の中核とも言える建物で、見た目はガラスで覆われた網目の円錐形状。　30セント・メリー・アクスと言ったほうがいいだろう、全高三百メートルを超える名物の行政区画^{かんこうしげん}だ。

一度校舎から出て、徒歩でビルに向かい、エレベーターで統括理

事長室がある五十階に辿り着く頃には呼び出されてから三十分が経過していた。途中、エネルギーボードや動く歩道を使わない結果であるが、呼び出した当人と部屋の中で優雅にお茶を楽しんでいた【聖女】は笑顔で二人を迎え入れた。

部屋付きの顔馴染みの女性秘書さんが、二人の前に紅茶とお菓子を並べ、一礼して退出していく。ソファーに腰掛けた祐一がリシエルに片手を上げて挨拶し、桐人は腰を折って頭を下げてから着席した。

「授業中にすまないね、祐一」

「いやいや、静琉さんの呼び出しは今に始まった事じゃ無いでしょう？」

秋津宮 あきつのみや 静琉 しずる、二十五歳、秋津宮本家の次女で、既婚者。関東

で秋津宮の地を管理統括する責任者。付き合いが長すぎた祐一にとって、随分と歳の離れた姉みたいな親近感で接する事の出来る友人だ。

まだ【魔王】に成り立てだった頃の祐一を保護した実行者で、【選別者】トレーダーの称号者でもある。

この【選別者】トレーダーの称号は特殊で、地位は世界級と国級との間に据えられる。能力は唯一つ、『称号者を見極められる』事でしかない。しかし称号者から見れば、存在は希少で重要だ。国に存在する【選別者】全員に認められると、その【称号】は国級と成り。少なくとも三人からの認証が受けられれば、人外級と認められるからだ。

但し、日本に存在する【選別者】は二十人にも満たない。これは【選別者】を見極められるのが世界級を持つ者しか居ないからだ。本来ならば祐一がこの国における称号者を探さねばならないが、実際何処の誰か分からない者をどうやって探したらいいのか？と

本人が放棄しているせいである。

一応秋津宮が素養のありそうな者を片っ端から祐一に会わせているが、この十年で見つかったのは三人だけだ。静琉はそのうちの一人である。

「話と言うのは、魔属ゾロゾロ事件ですか？」

「おや、話が早くて助かるよ。朝から聖女殿を案内していたんだけどね、行く先々で職員がパニックになって困っているんだ。魔属は君の担当だろう、どうにかならないかな？」

「横から失礼致します、静琉様。実はかくかくしかじか、……と言う訳です。閣下には対処のしようがありますが、それに関しては学園全域に迷惑が掛かるというので、此方も頭を悩ませているのですよ」

全様を理解している桐人が『魔』と『聖』の関係に付いて述べた。それだけ聞けば責任の一端は静琉にもあるので、彼女も苦い顔になる。全国から称号持ちが集まる学院とはいえ、九十六パーセントは一般人だ。その耐性の無い者が【魔王】の波動をモロに長時間浴びて、まっさらに無事と言うわけにもいかないだろう。

桐人と静琉が難しい顔で黙ると、嬉しそうな顔をしたリシエルがポンと手を叩いた。

わたくし
「私に良い考えがありますわ！」

「へー」

「私と同盟を結びましょう、ユーイチ！」

「へー………、ってなにいいいいっ!？」

聖女のトンデモ発言に桐人と静琉は目を丸くし、祐一はソファからずり落ちた。絶句してる空気の中、【聖女】リシエル・フォ

トーンは矢継ぎ早に提案をする。

「この場で口約束と言えど、【魔王】と【聖女】である私達が契約を結べば、それは世界に対して認識化こていされます。そうすれば『聖』の波動であろうとも、『魔』は異物扱いをせずに受け入れるでしょう？」

「待て待て、それは『魔』が『聖』の上位であった場合だろう。
同盟たいどうだとそれは成立しねーって」

「いえ、それで間違ってますよ？ この場を丸く治めるのにはそれが一番でしょう」

「そりゃあ同盟じゃなくて主従契約だ！ 何考えてんだお前はっ！
本音を言え！！」

「四天王【聖女】って響きが良いと思いませんか？」

「女難の相ってこれかああああああああっ！！？！！？」

あれよあれよと言う間に目の前で交わされて行く、世間に公表出来無い危険な会話。 だらだらと脂汗をかきながら目の前のやり取りを見つめ、引きつった笑みで桐人を振り返る静疏。 視線で「この会話は本気か？」と問われた桐人は重々しく頷いた。 基本的に【聖女】は冗談は言うが嘘は言わない。

間違いなく目の前で恐ろしい四天王の一角が誕生した瞬間だった。

次の日の四時間目の授業時間中。

リシエルはサンドウィッチとオレンジジュースの乗ったトレイを手にも、空中庭園としてある木製のテーブルが並ぶ場所に足を運んでいた。お供のSP達には傍に居る事を遠慮して貰っている。これから会う者がそういった煩わしい者達を嫌う傾向にあるからだ。

授業時間中にも係わらず三十人は座れそうなテーブルについていたのはたった一人の女生徒だけ。黒い綺麗な長い髪をポニーテールにし、制服はこの高等部の者である事を示すブレザーを着ている。彼女の前に置いてあるのは空のトレイ、本人はストローを加えたままぼんやりと頬杖をついていた。【聖女】リシエルが対面に立って「ここ、相席宜しいですか？」と声を掛けても視線を動かそうともせず「んー」と覇気の無い返事を返すだけだった。

リシエルは彼女の前に座るとおしとやかな手つきでサンドウィッチを食べ、音も立てずにジュースを飲み干す。

その間ポニーテールの女生徒は最初の姿勢から身動きせずにぼーっと虚空を眺めていた。ただ啞えているストローが風に揺れているだけである。軽い食事を終えたリシエルも何の行動も起こさず、

ただ静かに緩やかな風に吹かれているだけだ。

沈黙に耐えられなかったのか女生徒が先に口を開いた。

「お礼を言うならお門違いだよ。私は只、仕事だったからね……」
「それでも、貴女がそう言ったものを感じてないとしても言わせてください。ありがとうございます」

リシエルが目線だけの礼をすると女生徒は小さく舌打ちをした。

「私はアレが気に入ったんだ、お前に礼なんぞされる云われは無い」
「まあ……、それはまた珍しい言葉を聞いたものです」

感心した様子を見せるリシエルを女生徒は眼球を動かす事だけで睨み付けた。黒銅の瞳の色の奥、そこに浮き出た白い光。それだけを目にしたリシエルは慌ててトレイを持って立ち上がり、礼もそこそこにその場を辞した。

エネルギーボードを退散していく【聖女】をチラリと見ただけで興味を失った。

「……何年経っても傲慢なのは私の方か……」

表情を消した女生徒は再び虚空に目をやって、溜め息をひとつつくとトレイを持ってその場から立ち上がり、今まさにリシエルが通った道を下り始めた。

4話 魔王様と花師

東海林^{しょうじ} 春海^{はるみ}、十四歳、中等部二年。 彼女は人外級【花師】である。

【花師】と言うのは庭師の限定版みたいなもので、花だけなら季節関係なしに自由に咲かせる事の出来る称号だ。

花の意識が解ると言う彼女は幼少期に母親とのガーデニングにてその才能を開花させ、庭にあった株を全て満開にってしまった。流石に季節バラバラな花株が一斉に開花するという違和感に気付いた両親が専門家に相談し、秋津宮に回されて彼女が称号持ちだと発覚した。

秋津宮学院で生活するようになった春海には実験棟の中段三階層が丸々と与えられ、一階層四百八十平方メートル×三層が彼女の手によって常に春夏秋冬の花が咲き乱れている。

作られた花は華道部だとか、学院の催しだとか卒業式等の式典や祝いの席に出荷されていた。その際の収入の大半は維持費（肥料代・水道料金・その他備品代）に回され、一部が彼女の懐へ。それでも年収は八桁に行くので、義務教育中の学生にしては中々に稼いでいると言えるだろう。

本人としては大金を使う気もないので、大半は実家に送っている。

そんな彼女が最近気になっているのは、寮からの通学路途中にある商業地区で見掛けた雑草のような花だった。放課後や休日にな

ると人通りが増える大通り脇の、街路樹の根元に生えていたのを偶然見付け、毎日のように様子を見ていた。

花卉は水仙に似て、茎や葉はチューリップのよう。花びらには黒から茶色のグラデーションに白い斑点が先端にまぶしてあって、図鑑にも知識にも無い。何より彼女がそれを花と確定出来ないのは、意志を感じ取れない所にあった。短い生の中で千種類以上の花を扱って来た彼女にとっても初めての出会いで、学院の専門家に話を聞きたくても、新種だと言って取り上げられる可能性があるので、誰にも相談出来ずにいた。

ある日、何時ものように授業を終え、自分の庭園の世話も済ませて小さな一株の世話に向かった春海。そろそろ自分の庭園の一角にあの子を移そうかと考えていた。肥料を与えても水を掛けても効果があつた様子も無いのに、空気が悪い、日当たりが悪い等の悪条件の中で枯れそうな感じも見受けられ無い。大学部の方に国級の【賢者】がいると聞いたので、時間があつたら訪ねてみようと思った。

商業地区の大手デパート前、何時もの場所に向かった彼女の前には衝撃的な光景が広がっていた。私服姿の男性達が、彼女の愛しの君の場所に煙草をふかしながらたむろしていたからだ。

一瞬何が起きているのか啞然とした春海は、愛しの君が生えている場を男が蹂躪している現実を認識した。春海がじっと見ているのに気付いた彼等が、訝し気な視線を向けてくるのも構わず突撃し、

街路樹に背を預けていた男性を突き飛ばした。

足に隠れて見えなかった花は、葉の一部を踏まれていただけだと判明し、「良かったあ……」と安堵した。が、そうなってから初めて自分の行動が不味かった事に気付いた春海は、腕をかなり強引に引っ張られて剣呑な表情をした男達の刺すような視線に晒された。

「おい、アンタ。いきなりナニしてくれてんの？」

「……あ、ご、ごめ……」

「ゴメンで済んだら警察も警備員もいらねえよ！ ナニ考えてんのテメェ？」

怯えた表情の春海に、大学生らしい男達の口元は楽しいモノを見つけたように歪む。ぶら下げられた状態だった春海は、降ろされた途端に乱暴に突き飛ばされ、ガードレールに背中を強打して悲鳴を上げるより呼吸が詰まり、咽せる。

周囲にいた者は迷惑そうな顔で、しかし彼等とは目を合わせないように、その場を避けて足早に通り過ぎて行くだけだ。顔をノロノロと上げた春海の脇、ガードレールに土足が音を立てて叩きつけられ、「ひっ!？」と息を呑んだ。頭の上から高圧的に暴力的な嘲笑が掛かる。身を竦めた彼女の頭に置かれた手が、万力のように絞め付けてきた。涙声で謝罪を呟いたが男達は愉悦に顔を歪ませ、笑いながら慰謝料を請求する。

「止めなさいっ!」

横合いから強い非難の声が掛けられたのはそんな時であった。

眷属に呼ばれるまま、真門祐一が三条桐人と妹を引き連れて、商業地区へ足を運んだある日の放課後。

「こっちのほうだと思ったんだが……？」

「魔属が、ですか？ 魔王の膝元で目を付けられそうな事じけんを起こす者がいるとは考えられませんが」

「下っ端もいいところじゃないかな。呼ばれるっつか救難信号に近い感じ？」

「あっ！」

大通りに出た所で車道を挟んだ対岸の騒ぎを雪香が目ざとく見付け、唐突に走り出した。

「流石雪香さんですね。 ああいったところがファンに人気の秘訣なのでしょう」

客観的に見た感想をつらつらと述べる桐人だったが、その瞳には祐一に期待する感情が見てとれる。溜め息をついた祐一は妹が男達に喰って掛かる姿を見て、もう一度溜め息をついた。

「良いんですか？」

「これ以上悪名を上げたくねー。桐人が口先三寸で丸め込んでくれる」

祐一の言葉を噛み砕くように頷いた桐人は、祐一には理解できない楽しそうな、別の人から見ればかなり陰湿な笑みを浮かべ、「そういう事もありですね」と雪香の元へ向かう。

弱い者虐めに意識が向いていた男達が鋭い声に振り向くと、加害者の女子と同じく中等部のブレザーを着たすらりとしたモデル体型の女子が彼等を睨み付けていた。

「なんだよ嬢ちゃん、コイツの関係者？」

「違います。その子が何をしたか知りませんが、あなた達の行為を見過ごす訳にもいきません！」

「なんだア？ 正義ズラしてカンケーねえ奴が首突っ込んで来るんじゃないねえ……よ！？」

割り込んできた雪香にムカついた男は手を伸ばし掴み掛かろうと

したが、空振りしたのちに視界が回転、背中を強い衝撃に襲われ悲鳴を上げた。如何なる技術によるものか、間に入った桐人により宙を舞って舗装した路面に叩きつけられたのだ。

「な、なにしやがんだテメェ！」

路上で伸びた仲間の惨状に桐人に毒づいた残り二人の男達。春海の傍に駆け寄った雪香と男達の間に入った桐人は、肩を竦ませて男達を嘲笑した。

「せっかく助けてあげたと言うのに失礼な言い方ですねえ？」

「ざけんなっ！ 世迷い事抜かしてんじゃねえぞコラ！」

「タカくん投げ飛ばしておいて、ふざけた事言うんじゃねえっ！」

「【魔王】様の妹君に手を出す等、自殺志願もいいところですよ？それに……」

チラリと雪香に助け起こされている女子を見て、デパートの外壁に付いている監視カメラを見上げた。

「秋津宮で称号持ちに乱暴するなんて、随分と馬鹿な事を……」

と忠告する桐人の言葉を聞いた男達は真っ青になった。

秋津宮は称号持ちの保護区のような所なので、彼等の行為は厳罰モノだ。場合によっては学籍剥奪の上、秋津宮から追放も有り得るだけに桐人の言葉は死刑宣告にも等しい。

路上で気絶する仲間をも省みず逃げ出そうとした二人は、唐突に目眩を感じその場に力なくへたり込んだ。

「な、……なんだこりゃ。ち、ちあらがはいりゅあれえ……」

「弛緩の魔法だ。警備が来るまで暫く寝ている」

厳密に言えばそんなピンポイントな魔法は無い、夢魔などが麻痺と酩酊を混ぜて使う術式である。桐人が携帯から警備部に不埒者を引き取って貰うように連絡を入れた。雪香は春海を助け起こし、祐一は騒動の発端となった花を見下ろして「成る程」と呟いた。

「その花が閣下の探し物ですか？」

「ああ、どうやらコイツが助けを呼んでいたらしいな」

「この子の言ってる事分かるんですかっ！」

雪香に助けられて頬を染めお礼を言っていた春海は、聞きづてならない言葉に身を乗り出した。その剣幕に呆気にとられた祐一が頷くと春海は安堵した。桐人達は意味が分からず揃って首を傾げる。

「よかったー、私以上の【花師】の人が居て」

「何か勘違いしているようですが、閣下は【花師】ではありませんよ。【魔王】です」

「……え？ 【花師】とか【庭師】とかじゃなく？」

たらーりと特大の汗を流した春海の顔が引きつり、助けを求めるように雪香を伺う。

「うん、お兄ちゃんは正真正銘の魔王だよ。私が保障する」

「えええええエッ!？」

ずざざざーと後退して驚愕の表情をとる彼女を雪香は「ノリいなあ」とか眺めていた。

警備員が駆け付けて来たことで、改めて事情を聞く。むしろ春海が騒動の発端となる加害者側だったので、双方に対し嚴重注意が

下された。喰って掛かった学生達も理由を聞かされればしぶしぶ納得し、お互いに謝りあってこの場を水に流す事となった。

夕日が射し込む大通りで一応自己紹介を済ませると、雪香が春海の考え無しの行動に説教を始めた。警備部にも言われた上、それなりに名と顔を知られている中等部のヒーローから説教を受けた春海は目に見えて落ち込んでしまう。いつまでもここに真門兄妹を立たせていても仕方がないので桐人が話を進める。

「それで、貴女はこの花を此処から移そうとしていたと？」

「え？ あ、はい。ここ日当たり悪いし排気ガスも凄いいし、人通りも多いから可哀想だと思って……」

「そっちの方があっさり枯れる」

この中で一番花に縁遠いと思われる祐一の言葉に目を丸くする春海。溜め息を吐いた祐一は、掻い摘んでこの花は魔に属する植物である事、人の負の感情を喰って生存していると解説する。

「淀みもない清浄な所に植え替えてみる、即枯れるぞ」

「ううっ、余計なお世話だったんですね……」

「もう、お兄ちゃん！ 追い討ち掛けることないじゃない！」

魔の王に断言されて、更に意気消沈してしまう春海。雪香は兄の失言を嗜^{たしな}めて後輩を宥め始めた。この辺の気遣いには疎い自覚はあるので、祐一からのうんざりした視線を受けた桐人は苦笑しながら雪香の援護に加わる。最終的に春海ご自慢の庭園を見せてもらうことで話は落ち着いた。春海に案内されて行く妹と桐人。三人を見送った祐一は、特に寄り道もせず帰路に着いた。

兄に遅れること一時間、夕食の準備が整った真門家に帰宅した雪香は、両手いっぱいの花束を抱えてきた。色とりどりの花を食卓の上と玄關に飾り、上機嫌で春海の庭園が如何に綺麗だったかを語る。

「すごいいっぱい色んな花があったんだよ。いつでも来て下さいね、って言うてくれたからまた行こうと」

自分のことのように楽しげに話す雪香に家族からの視線は優しくだったが、祐だけはヤレヤレと呆れ顔だった。理由は称号者に付いて回る色々な制約の為だ。ここで雰囲気壊す気も無いのでとりあえず黙っておくが。

それからと言うものの、一週間毎に真門家の食卓には小さな花束が飾られることになった。妹の言によると熱心な真門雪香ファンによるものだそう。

5話 雪香さんと魔法少女

真門雪香、中等部三年。　そこそこ有名人で、立ち居振るまいが凛々しい仕草から『殿下』の名称を持つ（本人には不本意だが）。特定の部活動に属さず、あちこちの部活に助っ人として顔を出す。メインは名称の元になった男装役が多い演劇部だ。彼女が【魔王】の妹であることは、実のところあまり知られていない。

ある日の演劇部で、通し稽古の最中に些細な問題が起きた為、稽古が中断されてしまった。演出上の問題で役者側には大して支障はなかったけれど、その部分に拘っていた部長の落胆は見ていて胸が痛むほどの落ち込みっぷりだった。「急ぎ代役を捜すから心当たりがあったら教えてくれ」と言われ、本日の練習は中止になったのだ。

「魔法が使える人かー」

演出に【魔法使い】の称号を持つ人材を起用していたが、身内に不幸があったとかで急遽帰国してしまったらしい。WDAからの交換留学生だったので、戻って来る頃には演劇部の活動は終わってしまったている。

身近な友人や身内に魔法の素質がある者は数人。しかし、演劇部からの要求スペックに応えられそうなのは二人。姉みたいな幼馴染みと実の兄だけだ。碧に関しては魔法は魔法でも神道系なので、実際頼りになりそうなのは兄の祐一だけに絞られる。

「でもお兄ちゃんこういうの嫌がりそうだしなー」

幼い時分から【魔王】の称号者だった兄は、妹の前ではあまり魔王たる力を使うことはない。小さい頃に「魔王ってどーいうの？」と聞いた時も、なんだかんだと笑って誤魔化された記憶がある。

「あら、ええと……、真門さん？」

考えながら歩いていたら横合いから声を掛けられた。地味な茶色いスーツに長い髪を首の後ろから三つ編みにして眼鏡を掛けた女性。六月中旬から中等部に入って来た教育実習生八人の中でも、悪く言えば目立たないと言われている先生だった。

「ええと……、薪寺先生？」

「ああよかったー、忘れられたかと思いました」

心底安心したと言う笑顔で微笑むちょっと年上の女性、薪寺麻美。まさでらあさみ担当教科は数学で、声が小さくなければ教員としてはやっていくだろうと、生徒からは評価を得ている。

「何か悩み事かな？」

「え！ 顔に出てました？」

言い当てられたけれども、大した悩みでもなく。一番悩む所は演劇部の都合なのだと、軽い話題程度で話してしまう事にした。しかし、話が終わりになるにつれ、薪寺麻美の態度は挙動不審になっていた。視線は合わせようとせず腰を浮かしかけて、この場からさっさと立ち去りたい様子が見て取れる。

「あー、すみません先生。 たしかこの学外から来たんですよね？
だったら称号者の話とかしても分かりませんよね」

「ああああ、ち、違う違うのよ、真門さん。　そ、そうじゃなくてね！　話せばややこしい事情があるって言うか、称号者の苦悩も分からなくもないって言うか……」

何を言いたいのか支離滅裂である。　一介の教育実習生ではどうにもならないかと、雪香が諦めた時だった。

薪寺麻美を丸く囲む形で桜吹雪ならぬ蝶吹雪が下から上へ噴き出した。　捻れた床屋のシンボルマークみたいに黄色と黒の縞模様。　立ち入り禁止の警戒色、蝶吹雪の向こうで「あああ——っ！」と悲痛な叫びを最後に薪寺女史の声が途切れた次の瞬間、幾百幾千の蝶がポポーンとピンクや黄色い煙となって弾けた。　朦々と立ち込めるカラフルな煙玉をいっぺんに焚いたような中から「じゃっじやーん！」と少女が飛び出した。

流石に身内に魔王を持ち、学内で時折遭遇する称号者がらみの事件を見てきた雪香も嘔然とする。　左右に広がるふわっふわな巻き毛はブロンド、胴体に纏うは黒いインナーと胸から腕に掛けて黄色いヒラヒラしたレースの付いたジャケット。　ハイレグインナーの腰回りには申し訳程度の黄色いひらひらスカート。　膝までを覆う黒に赤い縞ラインの入ったロングブーツ。　背中に広がるのは禍々しい赤い翼、いや工事現場で交通整理をする警備員の持つ灯火ロッドが横に連結されて翼を形成している。　手に持つ物は鶴^{つる}嘴を柄の部分で繋げたどう見ても武器だ。　グ○ンダ○ザーの肩から飛び出すハーケンみたいなのをディフォルメした感じの。

「悩める若人の悲痛な叫びを受け、困難の壁を打ち碎きにここに参上！　破壊天使まじかるプラネットデンジャァース、略してプライミィ！　アナタの助けに天罰観面よ！」

ぽわぽわーんと向日葵ヒマワリや蒲公英たんぽぽが咲き誇るバッグを絵面に登場した。見た目的に痛い外見を持つことを自覚しておらず、どこから突っ込んでいいのか解らないUMA。どう考えても薪寺麻美が変身したにしてはビフォー↓アフターで姿形が違いすぎる。困惑している雪香をよそに魔法ダブルツルハンの杖をくるくる回し、何かの儀式を敢行していた。

「お願いプラネットデンジヤー、この子にアナタの力を貸してあげて！」

「えええええっ!？」

承諾もなしに未知のエネルギーなんか貰いたくないと逃げ腰になる雪香の前に、ドカン! と爆発が生じ、空中に浮かぶ青い矢印が現れた。厚さ1センチメートル、長さ50センチメートルのそれは雪香の眼前でくるくるくると回ると、ある方向で停止した。

「アナタの求める人はその先にいるわ！」

「うっわぁ……」

こんなものをオプション装備して行くななんて恥以外の何者でもない。件のUMAくだんは街灯の上に飛び上がると、周囲を見渡して、

「ふ、久しぶりに私のターン。悩める少年少女達よ、神のご加護をその目に焼き付けるといいわ! はーっはっはっはっハハハハハー!」

街灯の上をぴよんぴよん飛びながら高笑いがドップラー効果で消えて行った。

「……………なんという二重人格」

自己主張の激しい矢印に従い、指し示す先へ進んでみる。すれ違う人が矢印をヘンナ目で見たり、偶然会ったクラスメイトに称号者がらみの厄介事かと心配されたりしながら進むと、やがてたどり着いた所は商業区だった。

「なんか嫌な予感」

呟いた途端に矢印が急回転、真横を向いた所で横から伸びた手が矢印を握り潰す。つーと視線を動かすと、無然とした顔の兄がいた。跡形もなく消え去った矢印を握り締めた手を見て眉をひそめる。

「なんだ今のは？」

「あ、ええと……」

何と説明したものかと考えて辺りに目を向けると、例の魔花がある所だった。地面にしゃがみ込んでいた後輩の【花師】が目丸くして雪香を見上げている。矢印に注目し過ぎていて周囲の風景がよく見えていなかったらしい。

「だ、だだ大丈夫ですか雪香先輩！？ 悪い称号者にでも引つかかったんですかっ！」

「いやあ、そういう訳じゃなくてね」

「妙な魔力だったな。何と会った？」

「って、わああっ!？」 祐一先輩、何か有害そうな黒い煙がいつぱい漂ってます！」

「おお、落ち着いてお兄ちゃん。何もされてないから！」

祐一の感情の高ぶりに伴い、闇があちこちから集まって来た。黒煙の吹き溜まりみたいになって、辺り一帯が騒然としかける。なんとか雪香と春海が宥めすかして騒ぎは収まった。

騒ぎが再発するのも疲れるので一旦場所を喫茶店へ移し、ここに来るまでの事情を全部話す雪香。

「魔法少女なんて称号、聞いた事もないぞ」

呆れた祐一からの発言に、じゃああの変貌は何だったんだろうと不思議がる妹。春海は同じ校舎内なので見たことがあるが、学年担当が違うので会話をする事もないと言う。

「称号持ちなら自己紹介の時に言うなりしますよね？」

あきつのみや

秋津宮であれば【称号】がそれなりの身分保障に優遇制度が付く。

称号効果に対する実験テスト等に参加しなければならぬ等の制約が必須になるが、多少の収入もあるので称号者は大抵加入している。春海の場合は花を咲かせる行為がそれに当たる為、研究室に詰めて白衣に囲まれる事もない。祐一に至っては研究室は既に卒業して、都市内でのモニターのみに移行している。

混乱しかけた雪香と春海を制した祐一は特権のひとつを使う。

喫茶店のテーブルに装備されている秋津宮のシステムに携帯を繋ぎ、テーブル上に空間投射された画面に学籍番号を打ち込む。オレンジ色の河馬のぬいぐるみ似のマスコットが画面に出現した。校内での案内や説明などのチュートリアルを担当するシステムAIのロビーである。

『【魔王】からのアクセスを確認しました。何か御用ですか?』

「中等部に来ている教育実習生の名簿を出してくれ」
『了解しました』

直ぐに切り替わって八人の名前が羅列される。

「ええー、世界級ってこんなのが出来るんですかあ！ プライバシーの侵害とか大丈夫なんですか?」

「春海ちゃんの人外級でもこれくらいまでは出来るだろう。雪香、どの人だ?」

雪香は無言で下から二番目を指差した。

「これか。あと八丁目の小公園、三十分程前からの監視映像を全部出してくれ」

『了解』と返すロビー。画面上の薪寺麻美をクリックするとそこだけピックアップされ、名前・性別・年齢・生年月日・本籍・学歴が表示された。称号に関係するモノはひとつも記されていない。

「あわわ、いいんですかこれ」

「ログは残るからな、後でなんか言われるかも知れないけど。しかし実歴すらも触れてないな、称号者未認定か?」

雪香はなるべく画面を見ないようにして会話にも参加しない。

称号者関連の情報公開の場に居合わせた場合の一般人マニュアルとして、『四猿（見猿聴か猿言わ猿忘れ猿^{さる}）』と言うのがある。全部ログに残ってしまうので、無かった事にするのが身の為だからだ。やや遅れて流れてきた監視カメラ映像は、投射画面を消して自分の携帯で再生して確認する。三十分前の映像では途方に暮れる妹と矢印が映っていたので、巻き戻し再生させるとそこには二十代の女性が十四五の少女に変身する行程が保存されていた。

「確かに異能だなあ、これ……」

「うわあ、見てみたいなー」

祐一の呟きにコクコクと頷く雪香と、モノ欲しそうに携帯を見詰める春海。

「ロビー、この映像部分は俺の権限で閲覧制限にしろといてくれ、それと静琉^{しずる}さんにも報告。こっちの用件はそれで終わりだ」

『了解致しました』

「制限掛けたら見れなくなっちゃいますよう」

「どっちしろ春海ちゃんの権限じゃ、ここまで見れねーって。しかし見たことあるって言ってたな、称号者って判ったか？」

「えーと、全校朝礼とかで確か全員紹介されたはず……あ、あれ？」

祐一に言われた意味と自分の認識にズレがあるのに春海は気付く、称号者は称号者を見分ける事が出来るからだ。相手が未認定だったとしてもあれだけの異能持ちが解らない筈もない。雪香の話から本人に確認してみないと分からない部分もあるので、この場でどうこうは出来ない。

「二重人格の称号者なのかが判らん。にしてはあの矢印から感じた力が変だったしなあ」

「……それは兎も角ちよつと聞きたいんだけど？」

ここに来るまでにずーっと疑問だった事をやつと質問してみる雪香。

「どうしたんですかあ？」

「なんでお兄ちゃんと春海ちゃんが一緒に居たの？」

「私は何時もの通りですよ。花の様子を見に来たんです」

「俺もだ。花とは言え魔属だからな、ここまで下位になると何をしでかすか分からない。時々様子を見に来ている」

「そこまで警戒するなら植え替えるとか出来ないの？」

「今の所はこの魔属だけでここらへんのバランスは保たれているからなあ。花が枯れて球根だけになったら考えるさ」

どうやら魔王職もふんぞり返っているだけの仕事ではないらしい。兄の片面が少し見れただけでも嬉しく思う雪香だった。

「そういえば、雪香先輩は矢印に何を探して貰っていたんですかあ？」

「あー！」

言われて始めて思い出す、自分がなにやら大事に巻き込まれた原因を。こうなれば仕方ないので探し人の条件を兄に打ち明ける。

「じ、実は演劇部の方で魔法を使って演出するって話だったんだけど、予定していた人がダメになっちゃったんで……」

「それで俺か？」

「う、うん。 あ、でも、お兄ちゃんが誰か使える人紹介してくれるだけでもいいよ？」

申し訳なさそうに言う妹に思案するも、祐一の親交がある魔法使いと言うと地球の反対側にいる者を除けば、教師連中か四天王の一角くらいだ。 高等部にも遣い手は居るだろうが、親しくないの他人に頼るのは諦めた。 どうせ自分が動けば嬉々としてデータ取りに励む担当官の顔を思い出し、妹の頼みを二つ返事で了承する。

「分かった、引き受けよう」

「「ええええっ！」」

二重奏で上がる驚愕した叫びに祐一は顔をしかめる。

「なんで春海ちゃんも一緒になって驚くんだよ？」

「え？ だって祐一先輩って、そういうのとかやるイメージじゃありませんよお」

「まさか引き受けてくれるなんて、これっぽっちも思ってたから……」

色々と失礼な物言いにヘコむ祐一。 【魔王】としての見方から

いえば妹達の方が正論なのだろうが、本人はそんな悪人イメージの払拭を為したい第一歩目から全否定をくらい気落ちした。

「……ま、まあいいか。 とりあえずどうすんだ？」

「じゃあ、明日放課後に中等部の方に来てくれれば大丈夫だと思う」「分かった」

「見に行きたいですけど、明日は報告会があるんで、私は無理ですねえ」

「どっちにしたって発表当日まで部外秘だよ？」

「うー、残念ですう」

翌日、雪香は登校した途端クラスメートから『悩み事を無理やり聞いて回り、各所から非難囂々ひなんじょうじょうの苦情が出る程の強引な手段でもって解決する痛い魔法少女』の噂を聞かされて頭を抱えた。自分の矢印アレはまだ真っ当な手段だったらしい。

例を挙げると、『部室が欲しいと嘆いていた同好会に空き部屋を提供した。但しそこは別の部が使用していた部屋で、中身全部はそっくりそのまま屋上に放置してあった』とか『お婆さんが階段エスカレーターに乘らなくても渡れる歩道が欲しいと言ったので、車道と歩道橋を入れ替えた』とか。話を持ってきたクラスメートが現場の写真を撮っていて、そこには片側二車線の車道が階段付きのアーチになり、その下を歩道が通るといふ愉快な構造になっていた。他にも『放置自転車を何とかして欲しいとの願いに、秋津宮中の放置だけのみならず使用しているのと売り物に至るまでが1／24スケールモデルと化した』とか、『近所の犬が五月蠅い、との願いに秋津宮に生息する犬猫などのペット全てがぬいぐるみとなった』とピンからキリまで様々だ。悪意入りまくりの善意により、HR前に理事長から全域放送が入って指名手配が掛けられる程の騒ぎに発展した。

こうなると真相を知っている雪香はどうしたらいいのか悩んでしまう。昨日を思い出しても相談事の前後辺りから挙動不審になった薪寺麻美は自身の第二人格の事が判っていて他人の相談事から逃げ出そうとしたと思われる。直前までは本当に雪香を心配していたみたいなので、お節介なのは生来の性格なのだろう。元を正せば、あの魔法少女を目覚めさせてしまったのは雪香が発端とも言える。当の薪寺麻美は朝から憔悴状態で出勤してケアレスマスを連発し、担当教科の教師に怒られてばかりいた。オマケに雪香と目が合う度にビクビクして教科書を落したり、黒板に頭をぶつけたりと見ていて痛々しい。

「どうせお兄ちゃんに会うし、一緒に相談してみよう……」

問題を早期に解決すべく決意を新たにする雪香だった。

放課後になりしだい演劇部部长にメールして、練習には行けない旨を伝えてから行動を開始した。

教育実習生は普段使わない教室を与えられて、そこを臨時の準職員室とされる。雪香がたどり着いた時にはもう、扉を開ける前から廊下に怒鳴り散らす声の中から聞こえていた。聞き覚えのある声に雪香だけでなく、廊下を通る生徒までが表情を硬くする。やたらと高圧的で兎に角嫌みしか言わない校内の嫌われ者の教師だからだ。

一応は「失礼します」と声を掛けて中に入ると八人の実習生全員が説教されていた。この教師お得意の連帯責任らしい。雪香に気付いた者はアイコンタクトでさっさと逃げろと言ってくるが、用があるのは火中の者なので意を決した雪香は「あのっ!!」と声を

張り上げた。

「……なんだ真門、今は説教中だ。 用があるなら後にしろ！」

なにやら飛び上がって驚いたその教師は、失態を誤魔化すために強い口調で雪香を追ひ払おうとする。 そのリアクションに吹き出した実習生にジロリと睨みを利かせて。

「あの、薪寺先生に用があるんです！」

忙しいから後にしろと一点張りの教師の向こうで、絶望感漂わせた薪寺麻美が遠い目をする。 雪香にしてみれば別に告発するつもりではないので誤解は解いておきたい。 しかし嫌味教師が厳しい顔で雪香を睨んでいた。

「なんだ真門、これだけ言っても聞き訳が無いようだな。 お前は教師に逆らうというのか？」

「え、えーと……」

「いくら成績優秀者と言えど許容される事とされない事があるぞ。 なんの権限も持たない生徒ごときが教師に逆らうのが正しい行いというのか、ええ！」

暑苦しい顔をずいといと近付けて来たので、ずりずりと後退する雪香。 その目に愉悦の感情が浮びかけた時に背後から別の声が教師を押し留めた。

「だったら、【魔王】の権限でよろしいですか？」

「なんだ貴様は！」

何時の間にか開かれた扉の所に三条桐人が悠然と立っていた。

髪をかき上げその美貌に相応しく清々しい笑みを浮かべると、実習生の方からも感嘆した溜め息があがる。それがどうしたとでも言う態度で嫌味教師は桐人を睨む。

「桐人さん？」

「こんにちは雪香さん。本日も素敵な昼食をありがとうございます。私的にはアスパラの肉巻き、と言うのでしたね。あれが実に美味しかったです。他にもゴマをまぶしただけでいつもと風味の違ったキンピラゴボウとかが……」

「こ、高等部の生徒が中等部に何の用だっ！ それにここはナンパをする所じゃないっ！」

毎度の弁当の感想を言いかけた桐人を遮って大声を上げる嫌味教師に、いつもと同じく飄々とした笑みを浮かべていた美青年の雰囲気が変わる。草原を渡るそよ風が氷河を渡る凍えた風になり、その眼差しを受けた嫌味教師は「ヒィッ！」と悲鳴を上げた。

「用件なら述べたと思いますが、聞いていなかったのですか？

【魔王】閣下の命を受けてその薪寺麻美女史を迎えに来たのですよ。中等部は自分の庭だから雪香さんに任せたのですが、何時まで経っても出て来ないので私が足を運んだと言う訳です。お解かりになりましたか？」

いつのまにか先遣隊の役目になっていた雪香は啞然とするばかり、メールや電話をした訳でもないのに此方の事情が筒抜けになっている。【称号】を出された嫌味教師は一度怯んだものの、桐人に食って掛ろうとした。しかし胸ポケットからカードを引き抜いた桐人は、先手を取って素早くソレを教師の鼻先に提示した。雪香からはカードの絵柄は見えない位置にある。

「……なんのつもりだ？」

「おやおや、先生。貴方は足元がお留守のようですね。他人に説教する前にまずは自分の基盤から見直したらいかがですか？」

「ガキが……、脅しのつもりかあぶっ!？」

本性を現しかけ何か怒鳴ろうとした瞬間、両足をひよいと掬い上げられた嫌味教師は床へ顔面ダイブを敢行した。ドバン! と盛大に痛そうな音を響かせてあっけなく気絶する。彼の両足は、雪香の影から伸びたロープのような物にグルグル巻きにされていた。

その時点になって雪香は朝に兄から「何があるか分からんから、今日は護衛を忍ばせておく」と言われたのを思い出す。一連の出来事を只見ているしかなかった実習生達は、理解の範疇を越えた光景にポカーンと口を開けていた。影の魔物は体内から引き抜いた荒縄で教師を高手小手縛りにした後、包帯でグルグル巻きにしてから窓から外へ吊るした。ちなみにここは地上八階に当たる。

「さて、閣下のご命令です。薪寺女史、我々と一緒にご同行願いますね」

もはやドナドナと市場に出される子馬のような悲壮感を漂わせた薪寺麻美が前に出てくる。彼女の肩を抱くようにしながら桐人は教室を出て行こうとするので、雪香は慌ててソレに付いて行く。出る時に「失礼しました」と律儀に頭を下げるのを忘れずに。

校舎の外に出た桐人達に雪香が追いつく頃には、二人は離れていた。いつもの笑みを浮かべてゆったり歩く桐人の一歩後ろで俯いている薪寺麻美。追いついた雪香は思い切って彼女に声を掛けた。

「あの、大丈夫ですか? 薪寺先生……」

「ううつ、ありがとう真門さん。私のような犯罪者に声なんて掛けてくれて……。昨日はゴメンナサイね、ビックリしたでしょう？」

「え、た、確かにびっくりしましたけど。何かされたわけじゃないですから」

「おや、薪寺女史は犯罪者だったんですか。それは初耳ですね」

桐人があっけらかんと言った言葉に二人して拍子抜ける。そもそも兄と約束していたはずなのに桐人がココにいる事がオカシイ、先程の騒動にも介入タイミングが良すぎだ。

「あのー、桐人さんがどうして？」

「いえ僕も閣下に薪寺女史を保護して理事長の所に連れて行くように、とお願いされましたね。事情なんかはさっぱりなんですよ。」

ああ、申し遅れました。自分は魔王四天王のひとり、国級【占士】高等部一年A組、三条桐人と申します。以後よろしくお願いしますね」

「ご、ご丁寧にも……って魔王！ 魔王ってあの世界級のっ！？」

「ええ、その認識で間違いありません、その魔王閣下です」

それだけを聞いた薪寺麻美の顔は青を通り越して真っ白になっていた。「魔王に貢物として選ばれた生贄」が心中として正しいだろう。その顔色から兄に対する盛大な誤解を感じとった雪香は、どうしたらいいものかと桐人を見る。

「まあ、なんにせよ取って喰われる訳ではありませんので、その心配は杞憂に終わるでしょう」

「はあ……」

「ところでお兄ちゃんは？」

「ああ、閣下でしたら今回の下手人を捕まえに行きました」
「「は？」」

「御免なさい、もう一度理由を聞かせて貰えるかしら？」

行政区画の超積層構造ビルの統括理事長室で秋津宮静琉はコメカミを指でほぐつつしかめっ面をしながら、ソファに座る薪寺麻美に問い掛けた。

昼頃に真門祐一から放課後に話し合いの場を設けてくれ、とのメールを受けたのはまだいいとして。待っていたら来たのが三条桐人に連れられた薪寺麻美と真門雪香だったという訳だ。そこで昨日のトンデモ騒動の原因が、薪寺麻美の変貌した痛い魔法少女だというので彼女に心当たりを聞いてみた。聞いているうちにその場に居た三人の心はひとつになった。即ち「お節介にも限度があるだろう」と。

「ええと、そこにいた少年が言ったんですよ。『誰も手伝ってくれる人が居ない』って。だから、私で良ければ手伝おうか？と聞いたらですね、凄く嬉しそうに『ありがとお姉ちゃん』って言われたんです。お礼を言われると声を掛けて良かったって気になりますよね？ その子から貰ったのがこのピッケル型のストラップなんですけど……。え？ その子ですか？ 確か太めの菱形四頭身で糸目の潰れ餡饅顔で軍服みたいな服装だったですね。で、猫

耳の付いた帽子に狸みたいな尻尾がついてて、背中にはトンボの羽根を短くしたようなのが……」

「「その時点で人間じゃないと気付きなさい（よっ）！！」「」」

三人同時の呆れ返った突っ込みに、薪寺麻美は心底不思議そうな顔をした。

「ええっ！？ 何で非難されなきゃいけないんですか？」

「太めの菱形四頭身なんて人間がこの世の何処に居ますかつ！！」

「少しはおかしいと気付きましたようよ、先生……」

「事实は小説よりも奇なりとは言ったものですが、人の認識力と言う物にここまで大幅なズレがあるとは思いませんでした」

ひとりだけ冷静に分析している【占士】もいたが、静琉と雪香はお節介が往き過ぎて常識が取り残されている感のある薪寺麻美をたしなめている。全く理解してない顔なので、教え込むには長い時間がかかりそうだ。

と、そこで下手人を片手にぶら下げて祐一が来室した。本来であれば部屋の外にいる秘書が対応する区切りがある筈の所で一旦足止めされるも、顔パスなので慣れたものである。一緒にティーカップをもって入室した秘書は一礼して出て行く。

右手に「ふにゃ」とぶら下げられた物体は薪寺麻美の証言通り、太めの菱形四頭身に糸目の潰れ餡饅頭で軍服なコスプレと猫耳付き帽子と狸じみた尻尾を垂らし、背中から生えているのはトンボと言うよりは蠅の翅だ。^{はね}この場にいる者を代表し、秋津宮静琉が疑問を口にする。

「それは何なのよ？」

「見た目はこんなんだが、れっきとした悪魔の有力者。 蠅の王ベ

ルゼバブだ」

「……………」

「……………は？」

「……………ほう？」

「あ、この子です、この子！」

二人が呆然と沈黙し、一人が感嘆する中、薪寺麻美はその物体Xを指差し嬉しそうに微笑んだ。指差されたベルゼバブ（笑）はだらだらと顔面を汗まみれにして、ブリキ玩具のようにギギギと祐一を振り向く。薄暗い笑みを浮かべた祐一が「首実験はクロだがまだ申し開きはあるか？」と聞くと、がっくりと項垂れ「うにゃ〜」と萎れた。^{しお}

そこで薪寺麻美を縛っていたピッケルの呪いを解き、街中の異常事態を元に戻す。……で話が済めばそれで一件落着で終わったのだろうか、話はまだ続いていた。

「なんでこんな事に及ぶ羽目になったの？」

「だって魔王様が全然魔属としての自覚を持ってくれないんだぞ。」

トップがそんなんだから魔属^{オレラ}達の肩身が狭いんだぞ。自分は直接人界に手出しするのもアレなんで、関節的にでもちよっかいかけようかなあって思ったんだぞ」

「……………う〜う〜い〜ちい〜」

必然的にその場の責任者である秋津宮静琉の非難が祐一へと向かう。

「って俺かつ!? 俺が悪いのか?」

「トップがしっかりしないから下が苦勞するのよ! 貴方には統治者としての自覺が全っ然足りないわ、今すぐ帝王学の勉強をしましょう! ちょっとこっちへ来なさい」

「ちよっ!? 静琉さん、話がなんかすり変わってるすり変わってるって」

「ふふふふ、さあ貴方も素敵な帝王学を修めましょう。 Let's try! よ」

「って目が据わってて聞いてねえっ!?」

もはや目を逸らして他人事だと割り切った雪香は溜め息を付いた。こんな顛末だと改めて【魔法使い】を探さなければならぬようだ。そこで携帯で誰かと話をしていた桐人が通話を終わらせ、「行きましょうか」と雪香を促した。

「え?」

「雪香さんは【魔法使い】を探しているのでしょうか。今、その使い手の方と話が付きましましたので、顔合わせと参りましょう」

「あ、ありがとうございます。助かります」

「いえいえ、これくらいは毎日のお弁当の礼としては些細なものです。さ、薪寺先生も早い所ココから退出しましょう」

「え? でもあの真門さんのお兄さんはいいんですか?」

「お兄ちゃんは自業自得ですから、いいんです」

「閣下も偶には部下の苦勞を味わったほうがいいんです」

何か悲痛な叫びが聞こえたような気もするが全力で無視し、とばっちりを避けて逃げ出す三人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7778p/>

かくもそれは魔王様のゆるい日常

2011年10月1日04時27分発行